

令和3年度
全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）
及び北日本図書館連盟研究協議会

報告書

研究主題

『新しい生活様式の下での児童サービスの在り方』

配信（公開）期間・方法

令和3年11月25日（木）～12月9日（木）（YouTubeによる動画配信）

令和3年度 全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）及び 北日本図書館連盟研究協議会 開催要項

1 研究主題

『新しい生活様式の下での児童サービスの在り方』

2 趣 旨

図書館を取り巻く社会環境の変化は、時として、地域住民が図書館に期待する役割や機能を変化させます。

2019年12月頃、予期していなかった新型コロナウイルス感染症が出現し、世界を席卷する今、図書館が提供するサービスの在り方についても見直しを余儀なくされ、例えば、読書を推進する新しい取組として、読み聞かせをWeb上で動画配信する図書館があると話題となります。

私たちは、新しい生活様式の実践を伴う先の見えない難局の中にありますが、未来を担う子供たちの読書活動を支援するため、何をすることができ、何をしなければいけないのでしょうか。こうした時期だからこそ、児童サービスのこれからについて共に学び、考えたいと思います。

なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、インターネット配信により開催します。

3 主 催

公益社団法人日本図書館協会公共図書館部会
令和3年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会
岩手県図書館協会
北日本図書館連盟

4 主 管

岩手県立図書館

5 後 援

岩手県教育委員会

6 配信（公開）期間・方法

令和3年11月25日（木）～12月9日（木）（YouTubeによる動画配信）

7 対 象

図書館職員、社会教育に関わる職員、教職員（幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等）、保育所職員、保護者、子供の読書活動支援ボランティア等

8 内 容

■基調講演Ⅰ

「ファンタジーを楽しむ」

柏葉 幸子 氏（小説家）

（講師略歴）1953年岩手県生まれ、盛岡市在住。講談社児童文学新人賞受賞で「霧の向こうの不思議な町」でデビュー。主な作品に「つづきの図書館」「帰命寺横丁の夏」「岬のマヨイガ」「竜が呼んだ娘」シリーズ「モンスター・ホテル」シリーズ

■基調講演Ⅱ

「絵本と賢治と3.11と-コロナ禍で思うこと-」

藤澤 陽子 氏（「語りの会風楽堂」主宰）

（講師略歴）児童文学評論家赤木かん子プロデュース「盛岡語りの会雪ぼっこ」（二人組）。語りを古屋和子氏、発声を藤田京子氏、図書館改造他を赤木かん子氏に師事。岩手・東京・神奈川・愛知などで公演。H30日本文藝家協会にて独演会開催。雫石町立図書館に5年9か月ほど勤務。現在町立保育所所長。兄と三つ子の母。この本だいたすきの会支部長。全日本語りネットワーク会員。

■事例報告Ⅰ

「一関市立図書館における児童サービス～新しい生活様式への対応と学校連携～」

舩屋 藍 氏（一関市立一関図書館 主任司書）

■事例報告Ⅱ

「多様な取り組み方法への挑戦～コロナ禍でできることを探る～」

江刺 由紀子 氏（特定非営利活動法人おはなしころりん 理事長）

■事例報告Ⅲ

「ウィズコロナ時代の児童サービス～岩手県立図書館の取組～」

沼宮内 望 氏（岩手県立図書館指定管理者 司書）

■全体会（研究討議）

「これからの時代における児童サービス～未来を担う子供たちの読書活動を支援するために～」

【コーディネーター】

藤澤 陽子 氏（「語りの会風楽堂」主宰）

【パネリスト】

舩屋 藍 氏（一関市立一関図書館 主任司書）

江刺 由紀子 氏（特定非営利活動法人おはなしころりん 理事長）

沼宮内 望 氏（岩手県立図書館指定管理者 司書）

研究集会申込者数・視聴回数まとめ

【申込者数】 1,244 人

【視聴回数】

タイトル	回数
基調講演Ⅰ (柏葉幸子：小説家)	1,575
基調講演Ⅱ (藤澤陽子：「語りの会風楽堂」 主宰)	1,578
事例報告Ⅰ (舩屋藍：一関市立一関図書館 主任司書)	1,236
事例報告Ⅱ (江刺由紀子：特定非営利活動法人 おはなしころりん)	941
事例報告Ⅲ (沼宮内望：岩手県立図書館指定管理者 司書)	1,004
全体会(研究討議) (コーディネーター：藤澤陽子 パネリスト：舩屋藍、江刺由紀子、沼宮内望)	1,082
計	7,416

■ 基調講演 I

「ファンタジーを楽しむ」 柏葉 幸子 氏（小説家）



○柏葉幸子氏 皆様、こんにちは。柏葉幸子と申します。岩手の盛岡で童話を書いております。童話の中でも、特にファンタジーと呼ばれる分野でお仕事をしています。今日は、そのファンタジーを楽しんでいただきたいというか、ファンタジーをどう楽しむか、早い話は読んでいただければいいということだけなんですけども、私がどんなふうに物語を書いているか、それでどんなふうに物語を読んでいただきたいと思っているか、そんなことをお話しできればいいかなと思っています。

私は、学生の頃にですね、大学生の頃に講談社の児童文学新人賞という賞に応募をしまして、そこで賞を頂いて、「霧のむこうのふしぎな町」という本でデビューさせて頂きました。今から半世紀ぐらい前のことなんですけれども、そのときの選考委員の先生に佐藤さとる先生がいらっしゃいました。ちょっとお話からずれてしまうんですけども、さとる先生のお話をさせていただこうかなと思っています。

私はその賞を頂いて、さとる先生に初めてお目にかかって、そして私が上京するたびに講談社の編集者がさとる先生のお宅まで私を連れて行ってきて、それでいろいろとさとる先生からファンタジーのことを教えていただいたというか、お話を聞いたんですね。聞いたことになっているんですけども、本当に若くてですね、ただミー

ハーで、皆さんも佐藤さとる先生の本は「だれも知らない小さな国」という、コロボックルのお話なんかもご存じだと思うんですけども、日本のファンタジーの元祖といえますか、金字塔といえますか、その先生のお話を聞いたことになってはいるんですけども、本当にただのミーハーでして、さとる先生を見るたびに、わあ、ノッポさんだ、奥様を見ると、わあ、おちびさんだと、そんなふうに思っただけでした。本当にどじで、昔のことを思い出すと、わっと顔が真っ赤になるようなことばかりしてきましたので、よく若い頃に戻りたいとか、あの頃に戻れたらいいなっておっしゃる方がたくさんいるんですけども、私はもう今のほうが少しはましと思っている人間ですから、昔に戻りたいとか思ったことはないんですが、でもやっぱり一回昔に戻れるなら、さとる先生のお話をもう少しきちんと聞いておくべきだったかなと思っています。

さとる先生がさっぱり仕事をしないっていうので、周りの編集者たちが集まって、鬼ヶ島通信という同人誌を立ち上げました。子供の本の物書きと、あとは編集者が集まって鬼ヶ島通信という同人誌があって、でも普通の同人誌とはちょっと最初から毛色が違ってまして、もちろんさとる先生が物語をお書きになるので、きっちり読者がついていて、年に2回発行して、読者の方が買ってくださいという少しやっぱり商業誌みたいな形の同人誌なんです。そこに私は1号からお話は出させていただいたんですけども、ほかの仕事しながら、若かったですし、こいつはきちんと話を書いていくのかという周りの心配もあったと思うんですね。それで、同人にさせていただいたのは何号か後からでした。

今はですね、物書きは一応定年というものがありませんので、編集者たちは定年すると代替わりしながら、その後鬼ヶ島通信に携わってくださってます。これが一番新しいものなんですけど、そろそろその締切りも来て四苦八苦しているところなんで

すが、この中に道場があって、自分も物語を書いてみたいという方々がそこに作品を出して、そしてこれいいんじゃないかとかって評が出るわけですね。もう30年以上続いている同人誌ですので、そういうところから出てくださった人たちが鬼ヶ島通信の妹分という形で桃太郎という同人誌をつくっていらっしゃるんですね。その桃太郎の中から、今、賞をたくさん頂いて活躍している童話作家の方がたくさん出ています。私なんかは、本当におもしろかったとか、おもしろくなかったとかっていうことしかできないんですけど、半数以上が今第一線で活躍している児童書の編集者たちですので、目は確かだと思います。この鬼ヶ島通信も物語を書きたいと思っている方々が利用してみてくださいのもいいかなと思っています。ちょっとお話がそれてしまったんですけども。

それで、初めてさとる先生にお目にかかったときに、さとる先生は、あなたの物語はファンタジーだねとおっしゃいました。私は、ファンタジーというものが、その頃本当に聞き慣れない言葉だったと思うんですね。それで、ああ、不思議な話をファンタジーと呼ぶのかなという、そんな認識だったと思います。「霧のむこうのふしぎな町」を、賞を頂いて出版していただいたのでというので、お子さんだけでなく、大人の方も読んでくださいました。

その中でやっぱり大人の方は、あなたのようなお話って、何で普通のお話を書けないのだろうというような、責めるでもないですが、「もっと普通の話を書いたらいいではないか」というような口調の方もいらっしゃいましたし、学校の先生たちは、「あなたのようなお話を読める子は」っていうようなことをおっしゃったんですね。「あなたのようなお話」っていうのは、そのファンタジーだと思います。先生方もその頃ファンタジーという言葉をご存じなかったのだろうと思っています。そう言われて、私は、ああ、私みたいなお話を読める子って少ないんだと、その頃思いました。

もちろん本を読むということは、その主人公に自分の身を添わせていく、この子かもし自分だったらっていう想像力も必要ですよ。もし小学校でお話が始まり、ランドセルを背負った主人公が学校に行っこんなことがあった、先生とこんなことがあ

った、お友達とこんなことがあったっていうお話だったら、自分も、あっ、明日こんなことがあるかもしれない、昨日こんなことがあった、同じようなことがあったな、想像が付きやすいんだと思うんですね。

でも、私みたいな物語はですね、私の物語でいいますと台所の床から竜がはい上がってきたり、ぱっと目を覚ますとベッドのそばに魔女が2人立っていたり、自分の家から白い着物を着た幽霊だろうと思う女の子が自分の家から出ていくのを見たり、そんな突拍子もないところからお話が始まっていきます。

ですので、普通の物語を読むよりは少し大きな想像力、そんなものがお子さんたちに必要なのかな、だからファンタジーを読むのは大変だ、難しいと思うのかなと思っていました。ですので本当にあの、物語を書くときに、まさかこんなことがあるはずがないと思っている読者を自分の世界に丁寧に丁寧に入ってくれるように一步一步ゆっくりお話の中に入ってくださいるように丁寧にお話を書いてきたつもりであります。

ですが、今はですね、ファンタジーという言葉が市民権を得まして、本の中でも、映画の中でも、テレビでも、アニメでも、ああ、ファンタジーってこういうものなんだなということを皆さん分かってくださっている。こんな世界っていうものにぼんと自分から飛び込んできてくださる、どんな小さなお子さんでも、あっ、こんな感じなんだなって分かっている、そんな時代になってきたと思っています。

ですので、ファンタジーをお届けする側としては、とてもやりやすい時代になったなと思っています。でも、やっぱり本を読むということは想像力を培うというか、お子さんたちに想像力をつける大事な作業だというか、力になると思っています。想像力というのは、お子さんたちの相手を思いやるということにも通じると思います。今自分がこんなことを言ったら、こんなことをしたら、相手の人はどう思うのかな、嫌だなと思うのかな、うれしいと思うのかな、悲しいと思うのかなという、相手をこう思いやるという力にもなると思いますし、お子さんたちが将来こんなことをしたい、こんな仕事をしたい、こんなふうに生きたいという自分の夢を描く力の元にもなると思っています。ですね。

ですので、本を読むということは想像力をつける、想像力を培う、そういうことでもとても大切な、大事なことだと思っています。思っているんですね。思っています。でも、これは私にとっては建前といいますか、本を読むと想像力がつくだらうと思っていますっていうだけのことでして、私の本を読んでくださったときはですね、私はお子さんに想像力がつこうがつくまいが、構っちゃいないんですね。私は、こう自分の本を読んでいただいて、その最後本をばたっと閉じた時に一番聞きたいのは、「ああ、おもしろかった」っていう、「おもしろかったです」っていうその一言が聞きたい。そのために物語を書いているというか、いつもそう思っているんですね。

よくあなたの本、この本を読んで、どんなことをお子さんに感じてもらいたいですかとか、どんなことを学んでほしいですかとか聞かれることがあるんですけども、もちろんこんなことを学びましたとか、こんなことを感じましたという感想ももちろんうれしいんですけども、一番最初は、「ああ、おもしろかった」っていう声が聞きたい、そう思っています。

いつか講演会でですね、「私の本を読んでも何の勉強にもならないと思います」とお話ししたことがあって、悪いことにそれを私の担当編集者が聞いておまして、講演が終わって、やれやれと思った私をすごい怖い顔で、「柏葉さん、ちょっとこっちへいらっしゃい」と言うから、どうしたのかなと私は思っていましたら、「勉強にならないなんて言うてはいけません」と、すごいあの懇々と叱られたんですね。私の本を読むとこんなにいいことがある、お子さんはこんなにすてきに成長する、そう言っていたかかないと、お母さん方は本を買ってくれないと言われてしまいました。きっと、ああ、これが本当のことなんだろうなと思うんですけども、やっぱり「ああ、おもしろかった」って言うてもらいたい。勉強のために本を読むのではなくて、楽しみのために本を読んでほしい、いつもそう思っています。

どうしてそう思うのかなと思うんですけども、私の物語のつくり方に原因があると思います。私は、プロットを立てることができないんですね。プロットっていうのは起承転結で、大抵の作家さん

は編集者との打合せにこんな設定で、こんな主人公で、お話はこう進んで、そしてこんなふうになる、そんな打合せをします。ですので、大体こんな枚数くらいで、タイトルはこんな形ですかねみたいな、そんな打合せをすると思うんですね。

でも、私はプロットを立てることができない。起承転結でいえば、「起」の部分しか持っていないんですね。こんな設定で、こんな主人公、それですぐお話を書き出していきます。そして、お話を書いていって、こうだと楽しいかな、こうだとおもしろいかなと思いつきながらお話を書いていきます。主人公たちが力があって、物語をぐいぐい引っ張って、ごろごろ転がして大きなものになっていくのなら、そのままお話を書いていきますけど、なかなかこれじゃあお話つままないなと思うと、違う設定の違う主人公でまたお話を書いていきます。ですので、自分でどんなお話になるか分かっていないですし、何枚くらいになるかなんて全く分かっていません。ですので、編集者との打合せも短いものだから、今年いっぱいねとか、長いものだから来年の秋くらいまでには何とかかなりますかみたいな、すごいアバウトな打合せにしかありません。長いことこのお仕事をさせていただいておりますので、短いお話だと大体こんな感じかなと見当がつくようにはなりましたが、やっぱり長いお話ですと自分でも何枚になるやら、どんなふうになるのやら分かっていないんですね。

ですので、締切りがないお仕事だけを長いことさせていただいてたのですけれど、やっぱりこの10年くらいは締切りのあるお仕事も引き受けるようになって、特に大変なのは新聞ですかね。今は朝日小学生新聞に「竜が呼んだ娘」っていうのを3巻まで出させていただいて、今4巻目のお仕事をいただけて、来年の1月から連載が始まるんですけども、もう1年以上前からお話頂いているのに、今ちょっと大変で、うう、できないとか言いながら、今必死になってお仕事している最中です。

でも、大変だといいいながらも書いている作業がとても楽しいんだと思うんですね。よく昔からつき合いのある編集者に、「あなたの編み物に似ている」っていうんですけど、私あの手なんですけれど、編み物が好きで、毛糸を買ってくると、とにかく

すぐいじりたい。そして、編んでしまう。ちょっと大きかったなと思うとほどく、また編んでいって、今度はちょっと小っちゃかったなと思うと、またほどく。そして、毛糸が足りないなと思うと、カーディガンにしようと思ったんだけど、これは無理だなと思うと、じゃあセーターにしちゃえとか、そんなふうに出る上がもの分からないものを編んでいくんですね。編んでいる状態が楽しいんだと思います。

いつかですね、そのふわふわな温かそうな毛糸の帽子を編もうと思ったんですね。それで、毛糸を出してきたんですけども、ちょっと地味だったなと思って、じゃあビーズでも編み込んで、綺麗だろうからビーズを編み込んで帽子をつくろうと思いました。ビーズを買いに行って、アクリルのビーズとガラスのビーズと比べて、やっぱりガラスのほうが綺麗だなと思って、ガラスのビーズを買いました。でも、毛糸に通るようなビーズですから、そんなちっちゃなビーズではないんですね。それを編み込んで帽子をつかっていったんですけども、キラキラして綺麗なものですから、わあ、綺麗だ、綺麗だ、あっちにもこっちにも編み込んでおこうと、帽子を編んでいったんですね。途中で出来上がりを想像する力が私にはないんですね。さあ、できたぞと思った時にですね、ふわふわな温かそうな帽子をつくろうと思ったのに、出来上がったものはガラスのビーズがびっしり入った冷たい持ち重りのするなんか、こう西洋の騎士が兜の下にかぶる鎧帷子みたいな帽子が出来上がって、全然温かそうではなくて、家族の評判も悪くて、でもせっかく編んだからと思って、あまり寒くない日にかぶるんですけど、物語のつくり方も結局そのとおりで、出来上がりを想像できない。書いている最中がとても楽しい。で最後まで来て、ああ、そうだったの、あんたもこうなりたかったのねって思うんですね。自分でもびっくりする。

ですので、私が楽しんで物語をつくったように、読んでくださる方にも「ああ、おもしろかった」って、私が物語をつくり終えて、「ああ、おもしろかった」と思うように読んでくださる方にも「ああ、おもしろかった」と思っていたきたいんだろうと、そう思っています。ずっとそう思っていて、あまりそのテーマとか、こういう主

題でお話を書こうということは全くなくてですね、自分がおもしろいなと思うことを書き連ねていって、その中から、このお話からこんなことを感じましたとか、こういうふうに思いましたと言ってくださることも、それももちろんうれしくて、ああ、そういうふうに思ってくださるんだな、このお話からこんなことを考えてくれるんだと思っていることはあったんですね。ですが、少し考えが変わったというか、書き方がちょっと変わったかなと思うのは、やっぱりあの東日本大震災があつてから、少し私はテーマというものを考えてお話を書くようにはなってきたのかなと思っています。

私の「帰命寺横丁の夏」という本があるんですけども、それは単純な信仰というか、祈ればよみがえる命という幽霊のお話なんですね。私の家の仏壇にですね、お地藏様がありました。本当に黒いすすけた粗末なっていうのもあれなんですけれども、何で仏壇の中に仏像じゃなくてお地藏様が入っているんだって母に聞きましたら、昔は回り地藏という風習があつて、昔の無尽講みたいなものなんですけれども、1か月ごとにお地藏様が無尽に入っている人たちの家を回る。そのお地藏様がある家の方が皆さんの掛金を取る、そんなふうな信仰があつたんだそうです。お地藏様は、その家で1か月祀られていた。その信仰がなくなって、そのお地藏様が今私の家にあるみたいなんですね。

ええ、そうなの、おもしろいねと言って、話を聞いていて、その回り地藏とよみがえるっていうことでお話を書いていけたらいいなと思って書いていったお話が「帰命寺横丁の夏」というお話なんですね。盛岡の古い地図を見てましたら、本当に帰命寺横丁っていうのがあるんですね。それで、お一珍しい。命が帰ってくるんだと思って、そういうお寺かと思って、これはおもしろいなと思って、それで「帰命寺横丁の夏」という本を書いたんですね。

それがちょうど震災の4か月くらい後に出していただいて、それで案外皆さんに命が帰ってくるお話ねと、本当にたまたま偶然だったんですけども、ああ、こんな時期に、こんなお話だったんですねって言うてくださる方がいて、ああ、そういえばそうだったと、私は全くそのことを思っていなかったんですけども、本当に大事な人

を亡くして、帰ってくれば良いと願っている人がたくさんいる時期にこの本を出していただけて、すごい私は、偶然にしてもすごく幸せなことだったなど、そのときすごいうれしかったんですね。

幾ら物語の中でも、亡くなった命が帰ってきてほしいと思っている方にこの本が届いたときに、少し助けになるというか、本当にこんなことがあればいいのになと思ってもらえるだけでも、私はすごくうれしいなと思っていました。ああいい時期、いい時期と言ったら変ですけれども、偶然こういう本を出してすごくうれしかったなと思っていますんですね。それで、命のことと時間が平等だということを実日本大震災の後に考える本になってくれたらば、この本はすごくいい本だったなと自分でもすごくうれしかったんですね。

それが今年の7月にですね、アメリカで出版していただきまして、「Temple Alley Summer」という題でアメリカで出版していただいたんですね。日本でつくるように、これ作中作が入っていて、作中作の中はこう色違いのページになっていて、すごい凝ったつくりの本だったんですけれども、本当にそのとおりにつくってくださって、表紙なんか日本のものよりも、幽霊の女の子なんですけれども、ちょっと浮き上がるような印刷になっていて、アメリカの本ってなんか表紙がピラピラの1枚のラミネートみたいな本の場合が多いんですけれども、すごいきちとした本をつくっていただいて、この本をアメリカのお子さんたちにもやっぱり読んでいただけて、命や時間のことを考えてくださることのお子さんたちが増えるといいなと思っている本です。

「帰命寺横丁の夏」が出て、この時期こういう命とか考えてくだされば良いなと思ったことが、やっぱり「岬のマヨイガ」という本にも通じたと思っています。岩手の盛岡に住んでいるものですから、震災の後、いろんな人たちから、岩手の子供はどうかの、元気なの、どんなふうに暮らしているのって、すごいこう聞かれました。

震災の3か月後だったと思うんですけれども、ペンクラブで被災地とどう関わっているかと、何十人も作家が呼ばれてお話しする機会があったんですね。それに私も呼ばれまして、私は盛岡なものですから、3か月たってお子さんたちが普通に学校に、も

う3か月たった後は通っていたと思います。それで、ああ、私はやっぱり沿岸の子供たちの様子をお伝えしなきゃいけないなど、取材に行かなきゃいけないのかなと思いました。でも、その頃は物見遊山で被災地に行く人が多くて、復興ボランティアの人たちがすごく苦勞しているというお話を聞いていましたので、私なんかがこのこ行って大丈夫なのかなと思いながら、でもまず話さなければいけないしと思って、伝手を頼って津波のあった地区の小学校と中学校の先生方にお話を聞くというように手はずしてもらったんですね。

そして、そろそろその日にちが迫ってきたなと思ったときに、テレビのニュースで、ここの小学校に私、今度お話を聞きに行くと思った小学校が映っていました。ディズニーの慰問があって、お子さんたちが大きなミッキーやグーフィーに歓声を上げて飛びついているっていう映像が映って、私、ああお子さんたち元気なんだと思って、ああよかったと思って、私今度この学校に取材に行くんだと思いながらその映像を見ていたんですね。

いざ行ってみて、戦争を知りませんが、戦後の焼け野原の写真というのを見たことがあったんですが、津波の後というのは本当にあんな感じでした。青い空の下にもう何もない瓦礫だけが残る状態で、学校の3階の建物に軽自動車が入り込んでいて、その状態を自分の目で見ました。こんな状態だったんだと思いながら、その学校にお話を聞きに行ったんですね。

校庭に若い人たちというか、女の人たちが校庭でブラブラしているので、あの人たちは一体何なのだろうと思ったのですが、学校は、津波もあつたんだけど、家を流されたりしない、今までどおり普通に通える地区の子供たちと、津波で学校も家も流されて、避難所からバスに乗って通ってくるお子さんたち、2つの学校が入っていたんですね。バスで通ってくる学校は間借りしていた学校だったと思います。その校長先生にお話を聞いて、あの女の人たちは何なんですかと聞いたら、お子さんたちがみんな赤ちゃん返りをしている。それで、一人で学校にバスでみんな乗ってくるんだけど、お母さんがついてこないとおえないお子さんたちもいて、お母さんたちがああやって終わるのを待っているんですよ

っていうお話でした。

ああ、そうだったんだと思ったんですけども、それでその先生が、この前ディズニーの慰問がありましたと、その慰問はサプライズだったんですよ。ですので、最初午前中は昔からこの学校に通っているお子さん達だったと、講堂が本当に割れるような歓声でいっぱいだったと、楽しそうでした。午後は、うちの子供たちでした。うちの子供たちは、講堂に集められただけで不安になる。震災のときに校庭に集められて、みんな手をつないで、先生に「走れ、走れ」って声をかけられて、もうその津波を背中に感じながら必死に走った。第1の避難場所も無理で、第2、第3、小高い丘の上までみんな走った。その恐怖をいまだに抱えている。ですので、不安でみんな怯えた表情になる。みんなが集められただけで怯えた表情になる。そこにミッキーやグーフィーが出てきても、大好きなだけけれど、うれしいんだけど、うれしいという表現をすることができない。そんな状態だったという話を聞きました。本当にまだまだ深い傷があるんだなと思いつつ、中学校の先生たちは、女の子たちは寄り集まって、あのとき怖かったね、こうだったねと泣くんだそうです。泣けるからいい。男の子たちは泣かない、そのときのことを心の中にぐっと押し込めて、東北の男ですから無口なんだと思うんですけども、冷たい塊をこう心の中に押し込めて、ずっと持っている。男の子たちは大変だと思うっていうふうに先生はお話ししていました。

内陸の先生方からも聞いたことがあるんですが、親と一緒に沿岸から内陸に引っ越してきた子供たち、転校してきた子供たちというのはすぐ分かります。笑わない、顔がちよっと笑ったように見えても、目は笑わない。ずっとその心の傷みたいなものをずっと持っている。そんなお話を聞いたんですね。

それをペンクラブの集まりでお話しさせていただいて、どうしたの、どうしたの、みんな元気であるのっていう声を聞いて、本当に私は早い時期から震災を、私は言わなければいけないんだと、周りに急ぎ立てられたというか、あんたが言いなさいと言われてたっていうか、伝えなければいけないのかなと、本当にこういうのは苦手で、特にこんな大変なものを私が取り上げるの

はおこがましいといつも思うんですけども、どうしてもおまえが言えと言われてるように、言わなければいけないんだなと思って、その頃、短編の二、三編は書いていました。でも、岩手のほかの物書きたちは、本当に震災すぐになんかペンを取っていないですね。大事な人を亡くして、家をなくして、仕事もなくして、大変な状態の人が隣にいるのに、文学なんて悠長なことをやられてはいけないという思いでしばらく皆さんペンを握るといことはなかったんだそうです。私は、そう思う、なんていうのか余裕もなくというか、どうなっている、どうなっている、おまえが言えと言われてるように、短編を二、三編は書いてどこかに出してました。岩手の沿岸にこんなことがあったんだよ、こんな思いをしている子がいるんだよということを私は言わなきゃいけないと思ったんだと思います。

ちょうどそのときに、それから3年くらいたったときですかね、岩手日報さんから連載しませんかと、テーマは何でもいいですと、とにかく連載しませんかというお話をいただいて、じゃあその震災のことをテーマにお話をつくらせていただこうかなと思いました。

そうして、その1年くらい前にですね、私は「遠野物語」の子供版というものを書かせていただいたんですね。偕成社という子供向けの出版社があるんですけども、その編集者に今、古典を子供向けに直して読んでもらおうという企画があって、いろんな人に頼んでいるんだけど、柏葉さんもやらない？とって、そのリストを見せていただいたんですね。その中に「遠野物語」があって、私は岩手に住んでいて、私は子供の頃遠野でも暮らしたことがあって、遠野にもいたことがあるのに、ほかの作家に「遠野物語」を取られたら大変かなと思って、じゃあ私は遠野物語をつて一応手を挙げたんですね。でも、私は「遠野物語」を今まで何回も挑戦はしたんですけども、おもしろいと思ったことがなかったんですね。手を挙げてしまったから、これは困ったぞと思いつつながら、何とか読まなきゃと思って、もう一生懸命読みました。

何でおもしろくなかったと思うかという、物語って4つに分けられると思うんですけど、「遠野物語」は結末がないお話が多いんですね。「起承転」あたりまであ

ればまだいいほうで、「起」と「転」あたりで終わっているっていうお話もあって、一番最初に挫折するのは、一番最初に載っている女神の話だと思うんですけども、皆さんご存じかと思うんですが、女神が遠野に3人の娘を連れてやってくる。その女神は、今晚一番いい夢を見た娘に一番いい山をやる、そういう約束をします。そして、寝るんですけども、一番上の娘に空から大きな花が降りてきて、娘の胸にとまる。それを一番下の娘が起きて見ているんですね。そして、その花を奪い取って、自分の胸に置いて眠る。朝、女神が一番下の娘にあなたが一番いい夢を見たから、一番いい山をやる。あのあたりで一番いい山なので、早池峰山だと思うんですけども、一番下の娘が一番いい山をもらうわけです。

それを見てですね、ずっとこのお話のどこがおもしろいんだって私は思っていたんですね。何でって、これで終わり。悪いことをした娘に罰はないのか、これは物語とは言わないと、私はずっと思っていて、何でこんなお話のどこがおもしろいんだと思っていました。でも、ずっと読んでいくうちに何々村の誰兵衛のところ、何々さんのお母さんの実家でとか、そんなふうには物語に住所と名前が書いてあって、そんなのをずっと読んでいくうちに、ああ、なるほどと思ったんですけども、「遠野物語」というのは新聞記事みたいなものなのかなと思ったんですね。私たちも何のどこどこで泥棒が入ったんだってっていうのを新聞で見て、ねえねえ、誰々さんのうちに泥棒が入ったんだってよっていうような物語とか、そういうことではなかったかと。もちろん新聞記事は、もしかして泥棒が捕まったという、また後で何日に入った泥棒が捕まりましたというのが載るんだと思うんですけど、「遠野物語」もそんなふうになんかあったんだよと、みんなが言い伝えてきた。本当のことだから、もちろん結末はない。もちろん結末のある話もある。でも、本当にあったことだから、結末がなくても当たり前なんだなと私は思いました。

世の中ってというのは、物語のように誰々さんがこうなって、そしてこうなって、「どんどはれ」なんですよというようにはならないんだと、いろんなことがあるんだということをお話しているのが実際にあったんだ

よと話しているのが「遠野物語」なのかなと思ったら、すごくストンと納得して、ああ、これはおもしろいなと思って、こんなお話が遠野に残っているっていうのは、日本でもこんなことが残っている、こんなものが残っているっていうのは遠野だけではないかなと思って、私みたいなおばあさんがいて、悪いことをして花を奪い取って、早池峰山をもらった娘は、最後はこんなひどい目に遭ったんですよって付け加えてこなかった遠野のおじいさんとおばあさんというのはすごいなと思いました。

いろんなお話が載っているんですけども、中に幽霊が出てくるお話があるんですね。私は、幽霊が出てくるお話も、ああ、本当にこの幽霊は出たんだろうと思ったんですね。小さなおばあさんで、着物が少し長過ぎたので、裾を折り留めて三角に留めていたおばあさんが亡くなるんですね。そうして、おばあさんの通夜るときに火を絶やさないうちに、そのおばあさんの着物の裾が炭斗籠に当たって、丸い炭斗籠だったので、炭斗籠がくるくる回る。そういうお話が載っているんですね。くるくる回る炭斗籠がすごい現実的で、ああ、回ったんだなと。

そして、そのときにその家に出戻っていた娘が布団からがばっと起き上がって、「おばあさんが来た」って、幽霊が来たって言ったその娘が起き上がる。そのお話が一つあって、それからまたしばらくたって、また同じ家で、また同じ幽霊が出るんです。その話も載っているんです、後日談のようにして。

昔のお葬式というのは、うちも私が子供の頃まではですね、四十九日までの間に本葬があって、一七日、二七日、三七日という1週間ごとにご近所や親戚を集めて供養していました。それで、四十九日まで来て、まず一段落するんですけども、その幽霊が出てくるのは三七日のあたりなんです。皆さんがやっぱり落ち着いて、おばあさんが本当に死んだんだなと思うあたりに、そのおばあさんが家の外にちょこんと座っている。おばあさんが、また幽霊が出たというお話が載っているんです、「遠野物語」に。それを見て、同じおばあさんがまた出たんだと思って、このおばあさんは本当に出たんだなと、私は納得しました。

「おばあさんが来た」と言って、がばっ

と起き上がるっていうのは出戻りの娘なんだそうです。あの時代によっぽどいい裕福なうちでも出戻りの娘というのは肩身が狭くて、母親にしたら、この子はどうやってこれから生きていくんだろうと心配したのではないかと、そんな母親は、やっぱり娘が心配で、幽霊になって出るよなど、私は出るぞと、この幽霊は本当に出たと思うんですね。ですので、ああやっぱり「遠野物語」っていうのは本当にあったことを淡々とこんなことがあったんだよと伝えてきた物語たちなんだなと思って、おもしろいなと、お仕事を通して初めて思いました。

それで、このお話を何とかして小さな人たちに分かりやすく伝えようと頑張るんですけども、本当に大変なお話だと5行ぐらいしかなくて、これをどうやって分かってもらおうかと思って、一生懸命考えて、ああ会話文も入れると少し身近に思ってもらえるのかなと思って、どうしてもこのお話は入れたい、遠野のカップの顔は赤いんだというお話をどうしても入れたくて、短いお話なんですけれども、これを何とかして、その物語の中に入れたい。

会話文に入れると、なんか栗の木の陰に子供の顔が見える。で、女の子と一緒に遊ぼうと誘うというところなんですけれども、そうするとここに会話文を入れようとする、「こっちにいらっしゃい、一緒に遊びましょう」と入れればいいなというのは分かっているんですが、なまじ地元なものですから、いや、やっぱりここは「こっちさこ、一緒に遊ぶべ」かなとかって思うんですね。でも、これは「遠野物語」を集めた佐々木喜善の大叔母さんが子供の頃の話だから、きっといいところの家の女の子なんだろうなと。女の子でいいところの家となると、「こっちさ、おんで、一緒に遊ぶべし」かなとか、いろいろ会話文をいろいろ東北弁で入れたいっていうところが出てきて、すごいストレスだったんですね。

そのストレスを抱えていたときに、岩手日報さんから連載しませんかって言われたので、じゃあ震災をテーマにして、あとはキワさんという不思議なおばあさんと、結ママという家庭内暴力から逃げてきた女の人で、そして親戚に預けられる途中だったひよりちゃんという小学校の女の子と3人の女の人たちが岬の家で、迷い家みたいな家で共同生活をするお話なんですけれども、

キワさんが何回か昔話をするシーンがあるんですね。そこはべったべたな東北弁で書いても、きっと岩手の人たちだから読んでくれるだろうと思って、すごいべたべたな東北弁で書きました。読んでくれるだろうと思ったんですけども、すごい評判が悪くてですね、読みづらいと言われて。耳で聞けば分かると思うんです。でも、字面で読むとすごく大変だったみたいで、私のストレスは解消されたんですけども、ああ読みづらかった、悪いことしたなと思って。本にして出していただいたときは、「昔々、あったずもな」と、最後の「どんとはれ」だけ残して、中のお話は普通の標準語で書いていただいて、そんなお話にさせていただきました。

連載している当時も震災から4年ぐらいしかたってなかった、ちょうど3年だったですかね、それでやっぱり沿岸の人たちにこういうお話は読みたくないって拒否されるんじゃないかと思っていて、連載中止も覚悟っていう形でお話を進めていたんですが、何ともなく最後まで連載させていただいて、講談社から出していただいて、一冊の本にさせていただきました。

そして、一冊の本にさせていただいて、やっぱり読んでもらいたい、おもしろかったと言ってもらいたいと単純に思って、沿岸のお世話になった学校にお届けしようと思ったんですけども、やっぱりトラウマを抱えている子供たちがいるので、こういう話はまだ読ませたくないって拒否されてしまいました。がっかりもしましたし、でも本当にあの頃の沿岸の先生たちは子供さんたちを必死になって守っていらして、まだ一生懸命守っていらっしゃるのだなと、また頭の下がる思いもしました。

でも、テレビ局が何とか読んでくださる子供さんを探してくださって、感想をいただいたんですけども、やっぱり悲しい思いをしたのは自分だけではないんだとか、ここで頑張って生きていくんだとかと、そんなふうな現実的な感想が多かったように思います。

私は、それでも物語の世界で、「ああ、おもしろかった」って言っていただきたいっていう気持ちがずっとあって、この物語を読んで、ただ「ああ、おもしろかった」と言ってくださるときが本当の復興なのかなと思うこともあるんです。すごいがっか

りしたんですね。ですので、その後すぐだったですかね、マヨイガを震災10年後をめぐりにお芝居のお話もあったし、アニメのお話もありました。すごくうれしくてですね、自分の拙い思いがいろんな人たちの思いでどんどん、どんどん膨らんで大きくなるわけじゃないですか。そして、大きくなって、誰かに届いていく、それがすごくうれしくて、ああ、うれしいと、すごくうれしかったんですね。

舞台は、竹下景子さんがキワおばあちゃんをやってくださって、本当にきれいなおばあさんで、おばあさんが申し訳ないみたいだったんですけども、そしてふしぎな人たちを舞台でどうするのかと思いましたが、演出が詩森ろばさんといって、盛岡出身の今すごい力のある演出家の方で、人形を使うって最初からおっしゃっていて、キシさんというチェコにいらっしゃる人形師さんから人形をつくっていただいて、コロナでたった1つよかったのは、その人形師の方がコロナでチェコに帰れなくなってしまって、人形をつくったほかに舞台にも出て、人形を扱ってくださって、すごい迫力で、舞台もすごく楽しくて、皆さんに褒めていただいて、コロナでなければもっと見ていただけたのと思いました。

今アニメもやっとその大変な状態の中で公開されて、アニメもコロナでなければと思う状態なんですけれども、川面監督というすごく真面目な、無口な、ロケハンで一緒にしたんですけども、岩手の土手の草は下から生えるのか、上から生えるのか、そんなことまで聞いて、うちの近くに四ツ家のお地蔵さんといって、被災地に悪者を退治しに空を飛んでくる大きなお地蔵さんがあるんです。そのお地蔵さんを見せて、すごいおもしろかったみたいなんですけれども、無口なので、私には何も言わなかったのが後で、すごいおもしろかったそうですよみたいなことを後で聞いたんです。そんな監督さんの思いや、そしてたくさんの人に見ていただくために、やっぱりアニメになると高校生くらいの主人公のほうに近い気持ちで見ただけなのでという脚本家さんの考えでお母さん役じゃなくて、お姉さん、アニメはユイ姉ということになっていて、そのユイ姉の声を芦田愛菜さんが。芦田愛菜さんの声では聞いたことがないようなとんがった声で物語を引っ張ってくだ

さって、大竹しのぶさんが「すんぺすな」とおばあさんが言うんですけども、すごい上手で、さすが女優さんってすごいなと思うんですけども、サンドウィッチマンのお二人がカップの声で、岩手県の達増知事もカップの声で参加してくださって、お料理なんかも岩手の料理研究家の方が一生懸命心を砕いてお料理をつくったのをそのままアニメに使ってくださった。

本当に皆さんの思いでもう大きく、大きくなって、私の本の世界がまた違う形になって皆さんのところに届く、本当に「岬のマヨイガ」というのは幸せな本になったなと今は思っています。たくさんの方に見ていただきたいなと思っているところです。

そして、「岬のマヨイガ」を書いている最中に、ひよりちゃんのお友達で、玲子ちゃんっていう地元の女の子がいるんですけども、その玲子ちゃんは自分の友達で狐崎という自分のふるさとから親の仕事の関係で都会のほうに転校していったお友達、カナちゃんという友達なんですけれども、カナちゃんからの手紙が来ないの、連絡がないのって泣くシーンがあるんですね。私は、今度はカナちゃんの物語も書きたい。ふるさとを離れていった子供の物語も書きたいって、マヨイガを書きながらずっとそう思っていました。いつか、マヨイガがまず一段落したらカナちゃんの物語を書こうと思っていたんですけども。

マヨイガを書いた後だったと思うんですが、短編も何編か書いていたので、その短編を朗読劇にして沿岸を回ったんですね。朗読劇を見てくださった皆さんが「よかったです」と泣いてくださる。やっぱり泣いてくださるんですけど、「こんなお話はこの土地じゃなくて、ほかの土地でやってくれ」と泣かれた。本当に私は恥ずかしくて、まだこんなお話は聞きたくないと思っている方がたくさんいるのに、なんてことをしたんだろうと思って、すごすごと引き下がるというか、私の物語に込めた思いなど皆さんの心の傷に比べたら届きっこないなと思って、私のカナちゃんの物語を書きたいという思いはその時点で本当に消えたというか、すごすごとなくなっていたんですね。

でも、コロナが始まりまして、ふるさとに帰れないってすごく嘆いている若い人たちがいて、ふるさとというのは若い人たち

でも帰りたいんだなと思って、またカナちゃんの物語をもう一回書けたらなと、カナちゃんの物語を書いてみたいなど、震災の後、去年書いたので、9年くらいたってですね、思いました。

今年、静岡新聞のジュニアウイークリーに1月から連載させていただいていた「人魚姫の町」というお話なんですけれども、今は青森の東奥日報と岩手日報のジュニアウイークリーでも連載させていただいています。カナちゃんの物語と言っているんですが、主人公がコウタという19歳の男の子です。そんなふうになって言うんでしょう、親の事情でふるさとを離れて、避難していった先で、すごいじめに遭うっていうむごい話もたくさん聞きました。ふるさとがなくて、大人の被災した方が被災して避難していった先でその人の詩を読んだことがあるんですけれども、「デラシネ」とかいう言葉を聞いて、根無し草という意味だと分かって、大人の方でもそう思うのだなと、子供だったらなおさらだろうと思ったんですけれども。

コウタという子は、自分のふるさとと、そして避難していった避難先の土地も自分のふるさとにしてしまえる。本当にそんな子いるはずないやと思って、避難したお子さんたちもいるかもしれませんが、2つその、自分の住んでいる今住んでいるところと、離れてきた土地を2つふるさとに思ってもらいたいなって願っている者がいるという気持ちだけでも届けばいいかなと思って、そんなお話を書かせていただいています。

ファンタジーというのは夢物語で、そのとおりに、まさかそんなことがあるはずがないと思う。もちろん願えば、祈れば、命がよみがえることはないですし、つらい思いをしているお子さんが2つふるさとを持てるようにならないかもしれない。でも、そういう希望がある、そういうふうな思いがあるということだけでもファンタジーは届けることができる。そう思う、そういう気持ちっていうものを読み取るっていうか、読み取っていただける、それを楽しんでいただけることもファンタジーの魅力の一つかなと思っています。

昔はですね、ファンタジーは逃避の文学とって嫌われたということを知っています。逃げるんですよね、結局違う

世界に逃げていく、現実には立ち向かわないで逃げていく文学ではないかと言われてた、嫌われたっていうふうに聞いたこともあります。でも、逃げたっていいだろうと私は思っています。そんなゴムひもが伸び過ぎて、プツンと切れるまで頑張らなくたっていい、逃げる場所をたくさん持っている、もちろんそれがどんなものでもいいと思います。本の中に逃げる、それでも何もファンタジーの中に逃げてくる、それでも十分そこでファンタジーが力を与えて、よおし、さあ、また頑張ろうかなって、こんな楽しいこともあったし、こんなこともあるかもしれないしと思って、また立ち上がって現実に戻っていきける、そんな力のあるものだと、私はファンタジーはそういう力のあるものだと思います。ですので、ファンタジーを楽しんで読んでいただければいいなと思っていますし、私自身もそういう力のあるファンタジーを書いていければいいなと思っています。

皆さん、たくさん読んでファンタジーを楽しんでいただければいいと思います。ありがとうございました。

■ 基調講演 II

「絵本と賢治と3.11とーコロナ禍で思うことー」

藤澤 陽子 氏（「語りの会風楽堂」主宰）



【はじめに】

○藤澤陽子氏 皆さん、こんにちは。語りの会風楽堂、藤澤陽子と申します。本日は、全国公共図書館研究集会にお招きいただきましてありがとうございます。本来ですと盛岡で開催の予定でしたので、今日は少しでも盛岡の気分を味わっていただきたいと思い、特産品であります紫紺染のお着物を着てまいりました。今日お話の中に出てくる郷土の作家、宮沢賢治も「紫根染について」という作品を残しているんですよ。

さて、昨年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行で、私たちの生活は一変しました。人の流れは制限され、新しい生活様式の中でIT化は加速し、時代は大きな転換期を迎えようとしています。今日は、図書館員のみならず教育関係の方々、教師、保育士、保護者、ボランティアの皆様がお聞きになっていると思います。私は、学者や研究者ではありませんので、ご期待に沿えるようなお話ができるかは分かりませんが、元図書館員として、また一人の語り手として、今子どもたちの読書推進に何ができるのか一緒に考えていきたいと思っています。

今日のタイトルにあるとおり、絵本のこと、それから郷土の作家、宮沢賢治から学んだこと、10年の節目を迎えます3.11東日本大震災のことなど、思うがままですが、絵本の読み聞かせを軸にしながら、コロナ禍で思うこととお話したいと思います。何か一つでも心に残ってくださればうれしいです。また、中で語りも入れさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

【語りとの出会いと図書館員時代】

さて、先ほど語り手と申し上げましたが、「語って何？」と思われる方もいらっしゃると思います。簡単に言うと、お話を覚えて語ることで、“素話”

とか、“ストーリーテリング”とも言います。

私は、平成25年に「語りの会 風楽堂」を旗揚げし、活動しています。風楽堂の名前の由来は、児童文学作家で絵本の読み合いの研究でも有名な村中李衣先生から、私の声を「風の吹いてくる声。流れのあるものなら物語でも民話でも何でも似合う」とおっしゃっていただいたことから「風」、また次にお会いしたときに「福袋をたくさん手渡されているような声」と言っていて、どんな声かよく分からないですけれど、楽しいのかなと思って「楽」、また語りは音楽ということから「楽」です。そして、「堂」は人が集まるところの意味で、語りは聞き手と語り手とのライブ空間なんです。語る作品は宮沢賢治などの童話、文学作品、古典、民話、昔話など、子供から大人まで楽しんでいただけるようにチャレンジしております。

平成29年には「盛岡語りの会 雪ぼっこ」という名前で、これは2人組のユニットなんですけれども、児童文学評論家の赤木かん子先生のプロデュースで首都圏や愛知県などで活動していました。

平成30年の4月には赤木先生の主催で東京の日本文藝家協会では一人語り公演もさせていただきました。新型コロナが流行してからは県外での活動は自粛しているところです。

さて、どうしてこういう活動をするようになったのか、ここで少し自己紹介をさせていただきたいと思います。私は、平成10年に結婚して、その1年後に長男が、その翌年に二男、三男、四男が生まれました。わかりますか。そうです。三つ子だったんです。結婚2年で4人の子持ちになってしまいました。ちなみに、子供たちは小さい頃、よく入院したので、我が家の教育方針は「殺さないように育てる」でした。この話をすると、今保育所長をさせていただいているんですけれども、保護者の方から肩の荷がおりたような気がすると喜んでいただいています。ですので、仕事から帰ると毎日が保育園状態で、てんやわんやの大騒ぎでした。実は、今日このような場所に立っておりますけれども、子供たちが小さい頃は疲れ果てて、正直なところ読み聞かせどころではありませんでした。

三つ子が小学校に入る頃、ママ友に学校図書ボランティアに誘われて、「勤めているので、平日の昼

間は行けない」と言ったら、諦めないんですね。「休みの日にやっているのがあるから」と言って、連れて行かれたのが盛岡市中央公民館の「母と子の読書室」のおはなし会でした。ボランティア仲間を増やしたいとき、諦めないというのはとても大切なことだと思います。

さて、それまで語りというと遠野のおばあちゃん語りぐらいしか知らなかった私は、そこで初めて図書館のストーリーテリングというものに出会います。そこでは、ストーリーテリングをメインに絵本や紙芝居、手遊びなどを入れておはなし会をしていました。そのときの語り手は澤口杜志さん、お話はアメリカ民話の「ものいうたまご」。あまりにおもしろくて、家に帰ってから早速子供たちに夢中で語っている自分がありました。そのときの語り手の澤口杜志さんは、文庫も主宰している大ベテランで、わらべ歌も詳しく、その後もたくさんのお話を教えてくださいました。今では赤木先生プロデュースの「盛岡語りの会 雪ぼっこ」の大切なパートナーとなっています。

さて、初めてストーリーテリングを聞いたとき、数人の子どもに向けた小さなおはなし会だったのですが、なぜか私の脳裏にはオペラ歌手のように素晴らしい声で舞台の上で心揺さぶるような語りを語っている人の姿が心に浮かび、語りは心を揺さぶるような芸術にまで昇華されるものではないだろうかと感じました。

そのため、活動していく中で、語り手としてもっと成長したいという思いが強くなり、東京子ども図書館の短期合宿やNPO語り手たちの会の基礎講座、全日本語りの祭りにも参加します。そこで出会ったプロの古屋和子さんの「雨月物語・青頭巾」の語り声が何週間たっても耳から離れず、とうとう弟子入りして、東京の方だったので、夜行バスで毎月通うことになりました。

語りをしていることから図書館に配属になりました。図書館では、県のブックリスト「いわ100きつず」の制作に携わったり、町内の全学校を回って学校図書館の実情を知り、雫石町では小学校の学校司書がついていなかったことから、学校図書館支援ボランティア「しずくいし図書隊」を、また町立図書館版の「図書サポ」の2つのボランティアを立ち上げました。

小学校の保護者会の会長の要望で、東京から児童文学評論家、赤木かん子先生をお迎えし、小学校の図書館改造もしました。これが赤木先生との出会いでした。このときは、学校の保護者のみならず県内外、遠くは山形からもボランティアが集い、赤木先生の発案でボランティアさんに本の寄贈までしていただいて、子供たちが喜んで集う図書館ができました。この学校は、翌年、文部科学大臣表彰をいただ

いております。その後、赤木先生に町立図書館の児童コーナーも改造していただきました。異動で一旦図書館を離れましたが、昨年6月、図書館にまた携わることができ、今春、町立図書館は文部科学大臣表彰をいただくことができました。

語りの活動に戻りますが、その後もJ P I C読書アドバイザーの資格を取り、そこで出会った友人に誘われて、「この本だいすきの会」の「年の暮れ集会」に岩手県から初参加。「この本だいすきの会」は、今では岩手支部ができました。そして、たくさんの方々が全国にできました。

赤木かん子先生から、「ボイスやらない？ 世界が変わるよ」とご連絡をいただき、「和 アカデミー」の藤田京子先生にボイストレーニングを受けるようになります。首都圏でご依頼をいただくようになり、「盛岡語りの会 雪ぼっこ」の活動につながっていきます。

ここで、3人の師匠についてお話をさせていただきます。

1人目は、ひとり語りのパイオニア、古屋和子さん。先生は、「語りは音楽」、また「呼吸は文化を越えても伝わる。普遍性を持っているのは、言葉の意味よりも音と呼吸である」と教えてくださいました。「伝えたいことがある人は、みんな語り手よ」とおっしゃっていました。

2人目は、児童文学評論家、赤木かん子さん。時代の文化を読み、時代の最先端に行く鋭い視点と、温かい大きな人柄の先生です。

3人目は、「和 アカデミー」代表の藤田京子先生。日本ではなじみのないこのボイストレーニングは、体の仕組みであるメカニックの部分と、体を使うテクニックの部分、呼吸法を学びます。先生が歌うと体中を音の優しいミストシャワーで包まれたような感動なんです。

素晴らしい出会いがあり、一流の3人の先生につけたことは本当に幸運だと思っています。

【宮沢賢治の語り その1 「序」】

さて、地元岩手の生んだ宮沢賢治の作品は、特に思いを込めて挑戦しています。賢治は首都圏でも人気がありますが、赤木先生に言わせると、「賢治は東京にいとファンタジーだけど、岩手に来てみたら、そのまんまじゃんと思った」とおっしゃっていました。また、東京と愛知で語ったときのお客様の感想から、「賢治は冷たいと思っていた。でも、岩手のなまりで聴いたら、温かい感じがした。印象が変わった」というご感想をいただきました。

賢治は生前、童話集を1冊だけ出しています。イーハトヴ童話『注文の多い料理店』です。その「序」ですが、賢治の童話作品全ての序文であると思っております。

賢治を語るときに、最初にこれを語らせていただい

ております。どうぞお聞きください。

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやし青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということ、わたくしはそのとおりに書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そういうところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

大正十二年十二月二十日 宮沢賢治

この「すきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません」という言葉が私は大好きです。語るときに、この部分を毎回聞き手に手渡すようなつもりで語っています。

コロナが収まったら、ぜひ「そのまんまじゃん」を体験しに岩手に来てみてください。

【読書推進・児童サービスの「目的」とは】

さて、ここで今日の本題である新しい生活様式の下での児童サービスの在り方を考えるに当たり、そもそも読書推進や児童サービスの目的とは何かを確認したいと思います。

いろんな答えがあると思いますけれども、1989年の国連年次総会で、「すべての子どもは自己の能力を最大限に発展させる権利を有し、人種、性別、宗教、国籍、文化的背景、言語、社会的身分、個人の技能・能力にかかわらず、平等な条件のもとに、情報・資料・プログラム等に自由かつ無償でアクセスする権利を有する」と宣言しています。

それぞれの人生で、それぞれの能力を最大限に発揮して、自分の道を切り開いていけたらとても幸せなことですよ。世界中のすべての子供は、その持て

る能力を最大限に発展させる権利があるのです。そのため、情報・資料などに自由かつ無償でアクセスする権利がある。確かな情報や資料に無償でアクセスできる場所、それは図書館です。子供にとって、図書館サービスを受けられるかどうかは重大な問題なのです。

また、国際図書館連盟とユネスコのガイドライン『理想の公共図書館サービスのために』（IFLA/UNESCOガイドライン2001）には、次のように記載されています。「公共図書館は、広範囲にわたる資料を提供し多様な活動を展開することにより、子どもたちに対して、読書の喜びや知識と想像力にあふれる諸作品を見つけ出したときの興奮を実感する機会を提供する。」

「興奮を実感する機会を提供する」とあるんです。わくわくするところが図書館なんです。

続いて、「子どもたちとその親には、図書館の上手な利用のしかた、そして印刷資料と電子メディアの利用に関するスキルをどのようにして身につけるかを教えなければならない。」とあります。

子供だけでなく、その保護者の方も対象として図書館の利用教育、また印刷資料だけではなくて電子メディアの利用スキルの身につけ方を教えるのも図書館の役割なんです。

さらに、「公共図書館には、子どもたちが読書力を身につけるように支援し、本やその他のメディアの利用を促進する特別な責任がある。」と言っています。

そして、「図書館は、ストーリーテリングや図書館が提供するサービスや資源に関連する活動のように、子どもたちを対象とする特別なイベントを行わなければならない。」としているのです。

“行わなければならない”んです。ここにストーリーテリングも出てきましたね。日本では、ストーリーテリングはまだあまり知られていなくて、「読み聞かせでしょう」と言われてしまうことも多いのですけれども、海外ではストーリーテラーという職業もあるほどなんです。そして、図書館は“特別なイベントを行わなければならない”んです。やはり図書館で多いイベントは、ストーリーテリングや読み聞かせなどをする「おはなし会」でしょう。そして、図書館だけでなく、おうちでも最初に子供たちが本に触れる機会は読み聞かせではないでしょうか。

【読み聞かせで しあわせな気持ち ～タフな大人になる】

では、ストーリーテリングや読み聞かせの目的は何だと思えますか。これも様々な方が様々な答えを出していらっしゃるんですが、私が一番心にすんと落ちたのは、赤木かん子先生の『かならず成功する読み聞かせの本』（自由国民社/2008年）の中に書かれていた「子どもたちに幸福な気持ちになってもら

いたいから」という言葉でした。おもしろい本を読んでもらって笑ったり、興奮したり、わくわくしたりする。すると幸福な気持ちになる。そうして、幸福な時間をたくさん過ごした子供は大きくなって、タフな大人になる。幸福な時間は目には見えませんが、確実にその子の中に根を張って、その子をつくり上げていくのです。そうして、幸福かどうかを決めるのはあなたではなく、子供たち自身だとおっしゃっています。

【読み聞かせの効果①心の脳に届く】

実は、これは脳科学の分野でも証明されていることなんです。東京医科歯科大学大学院教授、この本を書かれたときの当時の役職でお話しさせていただきたいと思うんですけども、泰羅雅登著『読み聞かせは心の脳に届く』（くもん出版/2009）という本の中に、言葉が分かっているかどうかに関係なく、読み聞かせの何か、多分読み手の気持ちが子供の心の脳に届いて、“大脳辺縁系”と呼ばれる感情、情動に関わる働きをする場所が活動する様子が報告されています。

脳というのは三層構造になっていて、1つ目は「爬虫類の脳」と言われていて、脳幹とか間脳の部分がこれに当たります。これは、心臓を動かしたり、呼吸や体温維持をする場所です。植物人間になってしまうと、ここの部分は生きている状態だそうです。

2つ目が「旧哺乳類の脳」と言われている場所で、これが先ほど出てきた大脳辺縁系と呼ばれる部分です。ここは喜怒哀楽、我が身をたくましく生かしていく生存確率を高める脳なのだそうです。

そして、3つ目が「新哺乳類の脳」と言われているところで、大脳新皮質がこれに当たります。ここは、文化・文明をつくったり、言語の機能などをつかさどっているところになります。

そして、その読み聞かせはこの大脳辺縁系に届き、育むことが分かっているんです。

では、いつから読み聞かせをしたらいいのかということなんですけれども、実は胎児のときから一番最初に耳が聞こえ始めるというのを聞いたことありますか。実際に超音波でお母さんのお腹の中の赤ちゃんを見ると、お母さんの読み聞かせに反応して顔の表情を変えたり、一緒に笑ったりする様子まで確認できることが紹介されています。

また、先ほど「読み手の気持ちが」と申し上げましたが、別な実験では単なる音読や逆さ回しの音声などの場合、側頭葉は活動するけれども、大脳辺縁系の活動は示されなかったそうです。読み聞かせの場合は、お母さんは音読の領域だけではなく、子供に伝えようとすることでコミュニケーションの脳が働き、感情移入して読む、それが子供の大脳辺縁系の活動に現れるのではないかとおっしゃっています。

スマホなどネットの読み聞かせとか朗読CDなどではコミュニケーション、その子供に対して状況観察しながら読んでいるわけではないので、その効果は半減してしまうということが分かっています。

絵本を読むとき、お膝に乗せるスキンシップや生の声での読み聞かせは声のスキンシップと言われていて、幸せホルモンのオキシトシンが出て、人間の成長を助け、心の温かさを育むのだそうです。目を見て語りかけることで子供のコミュニケーションが発達し、愛着形成につながるということが分かっています。そして、なんと大人になっても読み聞かせには効果があるんだそうですよ。読み聞かせは、子供と自分の脳を育てられるのだそうです。

【読み聞かせの効果②学力の基礎になる】

また、読み聞かせの効果としてよく言われるのは、心の成長のほかに学力の基礎になるということです。2014年の全国学力・学習状況調査では、家庭状況と学力の関係について、「家庭社会経済的背景」、ちょっと難しい言葉ですけども、家庭の所得であるとか、父親と母親の学歴であるとか、それらが高い生徒は学力も高いということがデータで示されました。その差、何と算数と国語だったと思うのですが、2教科で平均約20点も差がつくということが分かっています。

しかし、その中で家庭社会経済的背景が低いにもかかわらず、学力が高い児童・生徒の特徴として、読書と読み聞かせを挙げています。小学生の学力に一番影響するのは、家庭での読書活動だそうです。

また、東北大学の川島隆太教授監修、松崎泰・榊浩平著の『本の読み方で学力は決まる』（青春出版社/2018）という本の中では、小中学生4万人の脳解析データから、勉強しても読書習慣がないと平均以下の成績しか取れないということが指摘されています。これ結構ショックではないですか。勉強しても平均以下の成績しか取れない。

また、幼児期の読み聞かせが将来の学力を上げるということも指摘されているんです。そう言われると、幼児期を過ぎてしまった方はどうしたらよいかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、安心してください。

読書をたくさんしていた子供たちほど神経繊維ネットワークの結束力が強く、さらに3年後の神経回路の発達度合いも大きかったということが指摘されています。幼児期が過ぎてしまった方でも3年後を目指して今からでも読書はお勧めです。

また、本のジャンルによっても脳の活性化する部位は異なるそうです。特に2歳半から低学年の時期は定義を覚え、言葉をたくさん吸収できる時期です。うちでもアンパンマンのキャラクターとかポケモンの名前など進化形まで正確に覚えて、この子天才かしらと思ったんですけど、大きくなったらそうでも

なかったんですけど、そのように全く関係のないような言葉であってもどんどん正確に覚えられるそうなんです。今の子供たちだと「鬼滅の刃」の型とかですかね、覚えていますよね。子供たちは、その時期に、関連がなくてもたくさんの言葉を覚える能力を持っているんです。興味のあるものなら苦もなく覚えられます。

また、「あれは何」とか、「何で」、「どうして」と聞くのもこの時期です。ですから、この時期に科学絵本や国語辞典、図鑑、百科事典などを見せるのもお勧めです。最初から読んでいってもいいですし、子供の興味に合わせて、見たいところから見ていくという見方でもいいと思いますよ。

実は忘れられないエピソードがあります。東日本大震災の後、愛知県の豊田市の猿投台地区の保育園、幼稚園、小中学校から震災の話をしてほしいとご依頼をいただきました。「私は内陸なので、津波を経験したわけではないので、私でいいんですか」と伺うと、「保育園児に話すには語り手がいい」ということでした。赤木かん子先生にも相談したら、地震の紙芝居のデータを送ってください、また積み木も使って説明しようと準備していきました。

幼稚園で、「地震が何で起こるか知っている人」と聞いてみました。そうしたら、5歳の男の子が「はい」って手を挙げて、「プレートがはねるからです」って言ったんです。度肝を抜かれました。この子は、プレートという言葉を知っているだけでなく、はねるから地震になるんだっていう、そういう仕組みも分かっていたことになります。後で聞くと、うちでも小さい頃から読み聞かせをし、本が大好きで、先生にもいろいろ教えてくださるのだそうです。

読書と学力の相関関係は分かりましたが、ではどのくらい読書をしたらいいのでしょうか。先ほどの『「本の読み方」で学力は決まる』の本の中に、勉強と読書と睡眠の関係が書かれています。なんと小学校5、6年生では、勉強だけ2時間やるよりも勉強を30分から1時間、睡眠8時間以上、読書1時間というのがベストだそうです。小学生のうちにはたくさん勉強させるよりもたくさん読書をして、幅広い知識や視野を身につけたり、豊かな感受性を養ったりしたほうが学力にも結びつくのだそうです。

中学生では、勉強2時間以上、かつ睡眠6時間から8時間、かつ読書1時間というのがいいですよ。睡眠も取らないと、寝る間を惜しんで勉強しても成績は伸びないということも書かれていました。もちろん人の価値は学力だけでは分かりませんが、その子の持っている能力を最大限に発展させる、子供が人生をたくましく、自分の能力を発揮しながら道を切り開いて生きていく、そのために学力は可能性を広げる手助けをしてくれるはずですよ。

【読み聞かせの効果③子育てが楽になる】

さて、ここまで読み聞かせの効果のお話をしてきましたが、皆さん読み聞かせがいいということは実はこれまでもよく聞いてご存じだったと思います。ところが、実際におうちに帰って現実を見たとき、どうでしょうか。実は私も最初にお話ししたとおり、子育て時代は疲れ果てて、読み聞かせどころではありませんでした。私の子供たちの保育園では図書室があり、本の貸出しもしていたので、本を借りやすい環境があったのですが、また保育園の先生からも読み聞かせをしてあげてくださいって言われていたのですが、寝る前に読み聞かせをしようとする、もう疲れ切っていて、半分寝落ちしそうな状態で、「桃から生まれた桃太郎は鬼ヶ島へ行きました、マル」となって、子供たちから「うそだ、うそだ」と騒がれた記憶があります。

メディア・コクリコの調査などによると、読み聞かせを負担に感じている親御さんが9割に上るそうです。そして、皆さん真面目だから、今日も読めなかったと自分を責めるんですよね。疲れていて読むのが面倒とか、同じ本を繰り返すのが苦痛などという声もあるそうです。“何でもしなければいけない”と思うと余計に疲れるものです。

実は先ほどの『「本の読み方」で学力は決まる』という本の中に科学的事実として紹介されているんですけども、実際に読み聞かせを8週間続けてもらったところ、親の子育てストレスがぐっと軽くなるという結果が出たそうです。やったお母さん方が「やってよかったです」という声がたくさん上がったそうなんです。これは、子供たちの脳は感情や情動の脳が動き、大人の脳はコミュニケーションの脳が動くことで、親子の良質なコミュニケーションとなり、子供たちの心が安定し、親への信頼と愛着が増すからではないか…ということです。それであれば、8週間後を夢見てチャレンジしてみる価値はありそうです。

でも、毎日読むのは大変と思う方もいらっしゃるでしょう。では、どのくらい読めばいいのでしょうか。経済協力開発機構OECDの調査、14か国のデータでは就学後1年間の親子の読書が「毎日から週一、二回」の子供は、「しない、ほぼしない」とか、「月に一、二回」の子供と比較して、15歳時点での学力スコアが高いことが、先ほどの本の中に書かれていました。

何冊読めばいいかという、一度に1冊から5冊でいいそうです。そして、週一、二回でも効果が認められているんです。「お休みの日に1冊から」だったら、そんなにハードルは高くないのではないのでしょうか。時間帯についても、すき間時間で構わないそうです。よく“寝る前に”って言いますが、冒険のお話とかだと寝る前に読んでしまうと目が冴えて、なかなか寝なくなってしまったりするんです

ね。だから、「今日は冒険のお話だから、御飯食べたらね」とか、「静かなお話だから寝る前にね」とか、できる時間帯で行えばいいと思います。親子で負担にならない楽しめる時間がいいですね。

さて、皆さん小さい頃の本で大好きな本ってありましたか。そんな話をすると、「11ぴきのねこ」シリーズが昔から好きで…とか、「14ぴきのねずみ」のシリーズが…とか、それぞれ大好きな本が浮かぶと思います。生後7か月ぐらいになると子供も好みが出てきます。子供の好きな本を選んでやるとよいそうですよ。

また、同じページや同じ本を繰り返し読みたい場合がありますが、繰り返すのはその本の情報を子供が取り込もうとしているときだそうです。主役は子供ですから、「またか」と思っても、御飯だと思って読んであげていただければと思います。

ところで、世界中で愛されているキャラクターにミッフィーちゃんがありますが、ミッフィーちゃんの横顔を見たことがある人はいますか。そうなんです。ミッフィーちゃんて、実は全部前を向いているんです。ミッフィーちゃんは、自分を見てくれるから、子供たちはミッフィーちゃんが好きなのだそうですよ。だから、上手に読めなくても、「大好きなお母さん、お父さんが自分に時間をつくって読んでくれている」…それだけで子供たちにとっては、愛情と幸せを感じる時間になるんです。うちの子供たちも大きくなってからも自分がおもしろいと思った漫画本を私に読むように持ってきます。世代が違うので、ちょっと私がおもしろいかは別なんですけど、ほとんどノルマのように持ってくるんですね。これは、子供たちは親とおもしろさを共有したいんだなって思っています。

兄弟が多い場合は、上のお子さんに合わせがちですけれども、一人一人好みも性格も違います。下のお子さんも一人一人が主役になるように今日は誰の日、次は誰の番というふうにするといいそうですよ。また、大きくなって文字が読めるようになって読め聞かせには効果があります。というのも「黙読」と、「音読」と、「お話を聞く」のは、脳の動く部分が全部違うそうなんです。ぜひ大きくなって読め聞かせをしてあげてください。

【読み聞かせをする側の効果①声】

ところで、実は読み聞かせは読む側にはすごい効果があります。少しそのお話をさせていただきます。まず、声についてです。今マスクをして、あまり声を出さない生活が多いと思います。ひとり暮らしの方はコロナでおうちにいて、声を出さずに一日を過ごしたという日もあるかもしれません。これは、国際医療福祉大学医学部の渡邊雄介教授が著書『フケ声がいやなら「声筋」を鍛えなさい』（晶文社/2019）という本の中でおっしゃっていることなんですけれ

ども、実は人の生死に関わる筋肉というのは3つあるのだそうです。腕の筋肉とか足の筋肉がなくても、人は死には至りません。では、どんな筋肉が人の生死に関わってくるのか。1つ目は心筋です。心臓の筋肉です。2つ目は、肺を動かす呼吸をする筋肉です。そして、3つ目が声筋だそうです。声筋という筋肉があるわけではないのですけれども、声帯は筋肉でできていますし、その周りの内喉頭筋の筋肉群を声筋と呼んでいるようです。そして、筋肉というものは20代がピークで、年々衰えていきます。30代、40代。40代を過ぎてくると、だんだんちょっとむせたりもするようになってきます。

声を出す筋肉の働きというのは、実は声を出すだけではなくて、声帯を閉じて気道を閉鎖し、息を止めるという役割があります。そうして姿勢を安定させ、必要なときに力むことができるのだそうです。ここを閉じられなくなると、体に力が入らず、体力低下の原因になり、転倒のリスクを高めたり、あるいは誤嚥性肺炎を起こしたりするのだそうです。

誤嚥性肺炎は、異物に含まれていた細菌が気道や肺で繁殖し炎症を起こすことで、唾液も口の中の常在菌を含んでおり、夜寝ている間に気道に入って肺炎を起こすこともあるそうです。怖いですね。結構誤嚥性肺炎で亡くなる方も多いですよ。健康や長寿の鍵は声と声筋が握っているとおっしゃっています。

では、どうやって声筋を鍛えるか。先ほどの本にも鼻呼吸と腹式呼吸がよいことが書かれています。

また、池袋大谷クリニック院長の大谷義夫先生は、1日3分の音読で声は若返ると提唱されています（『医師が教える「一日3分音読」で若くなる！』さくら舎/2019）。読み聞かせは、実は読んでいる本人の健康にもとってもいいわけです。

また、日本では発表会等で声を出すときに「大きな声出して」と言われるんですけど、そもそも発声法を教えていないという現実があります。そのため無理に大きな声を力を入れて声帯から出すために声を潰してしまうケースも見られます。

ある本によると、日本人の8割が自分の声が嫌いだといいます。（『8割の人は自分の声が嫌い』山崎広子著/KADOKAWA/2017）。同じことを話すのにも声質や抑揚で説得力は変わってきます。海外の政治家はボイストレーニングをするそうですよ。

師匠の古屋から聞いた話ですけれども、フランスの名女優サラ・ベルナールは、レストランのメニューを読み上げて、その場の人々に涙を流させたという伝説があるそうです。声だけで人は感動するんです。先ほどの脳の話でも、意味が分からなくても喜怒哀楽をつかさどる大脳辺縁系は動いていたんですね。

私のボイスの藤田先生からも、声は自然に出るも

ので、出すものではないと教わりました。そして、語りの古屋先生も、発声の藤田先生も、呼吸が大事だということをおっしゃいます。そのため、発声は呼吸法と体づくりから入ります。声の響きは、全体から伝わっていくんです。

【読み聞かせをする側の効果②脳の活性化】

また、読み聞かせは脳にもいい効果があることが分かっています。「音読」は、「黙読」よりも広範囲の脳が使われます。川島隆太教授の研究で、認知症の方に計算と音読をしてもらおうと、認知症が軽減したという話があります。「僕がジョンと呼ばれるまで」という映画にもなっています。

読み聞かせは、さらに相手に伝えようとコミュニケーションの部分が使われるので、脳の活性化につながります。実際に東京都健康長寿医療センターの研究で、海馬の萎縮を抑制することが指摘されています。脳の海馬は、記憶や学習をつかさどる部分で、50歳を過ぎると年平均1%ずつ減少するのだそうです。「健康モニター」と「絵本の読み聞かせボランティア」の2つのグループを比較したところ、6年後、絵本の読み聞かせグループのほうが海馬の萎縮がたった0.5%で、健康モニターは4.1%だったそうです。1%ずつ平均で減少するのだとすれば4.1%だって悪い数字ではないんですけれども、この読み聞かせボランティアの0.5%ってすごくないですか。この2つのグループは8.2倍も差がついて海馬の萎縮を抑制する効果が見られたそうです。ボランティア活動は、人と交流すること、また読み聞かせは言語活動で脳の広範囲が使われること、その相乗効果ではないかとのことです。

【伝えたいことがある人が語り手…ストーリーテリングのすすめ】

さて、今日は読み聞かせボランティアさんも多数お聞きになっていると思います。ストーリーテリングにも挑戦してみませんか。伝えたいことがあるのが語り手と、実は師匠から教わりました。海外では、伝えたいことがある人が語り手なんだそうです。日本だと何か発表しようとする、先に技術を身につけて人前に立とうということを考える方が多いと思いますが、海外では逆で、まず先に伝えたいことがあって、人前で話し、そこでうまく伝わらなければその足りない部分を学習していくという考え方のようです。それぞれ自分の人生や価値観など、人に語りたこと、伝えたいことがある方も多いと思います。ぜひ語ってみてはいかがでしょうか。

ところで、今よく図書館のおはなし会で語られるのは、本から覚えたお話です。語りは、五感で感じるのが大切です。暗唱ではなくて、そのときどんな風が吹き、どんな景色が目の前に現れたのか、どんな思いでその話をしたのか、語り手が感じたことが伝わるのです。ですから、語りは文字を立体に立

ち上げる作業でもあります。物語を自分の内側に感じて、聞き手に手渡す作業です。

語りは、そもそも文字のない太古の昔から世界中にありました。NPO語り手たちの会の基礎講座で学んだことですが、語りの語源について、国文学者、白田甚五郎の説では、「かつ」が「かた」、「かたる」、「語る」となった。また、「打つ」から「うた」、「うたう」、「歌う」となったとされています。つまり、魂を打つ、魂の衝撃が語りです。心をゆさゆさ揺さぶるのが語りなんだと教わりました。なので、語りをしていて、目指すものは人と感動を共有し、心を揺さぶる語りをしたいと思っています。

もう一つ、絵本と語りの違いをお話したいと思っています。語りには絵本がない。すると語り手は、心の中で様々な情景を描きます。例えば『こすずめのぼうけん』（ルース・エインズワース作/石井桃子訳/堀内誠画/福音館書店）という絵本を見ると、子供たちは自分の外にある絵本の中のこすずめを見ますが、語りで聞くと自分がこすずめになって冒険をします。そして、そのこすずめがどんな大ききで、どんな顔で、どんな表情か、人によって違うんですよ。

コロナ禍になってから、小学校のおはなし会もソーシャルディスタンスを取るため、机をそのままにして教室いっぱい広がって聞くことが多くなり、いつも読み聞かせに使っていた絵本が後ろの人から「見えない」と言われ、絵本を選ぶのが少し大変になりました。が、語りは声だけですから、見えなくて困るということはありません。もともと“メイン”に「語り」、「ストーリーテリング」を持っていたのですが、出番が増えたと思います。

【宮沢賢治の語り その2「とっこべとらこ」】

昨年、ある小学校の4年生を訪問した時のことです。私は、地元盛岡を題材にした宮沢賢治の「とっこべとら子」というお話を持っていきました。

宮沢賢治は、明治、大正、昭和を生きて、37歳で亡くなりました。その時代背景を子供たちに説明するのにどう言ったら今の子供たちがぴんときるのかなと考えて、「みんな、『鬼滅の刃』好き？」と聞いたら、「好き」と子供たち。「『鬼滅の刃』と同じくらいの時代の人なんだよ」と話すと、なんと、「じゃ、（賢治が）出てくるかも」と子供たち。なんとも微笑ましい答えです。

その日持っていったのは、盛岡の「斗米寅子」という狐を題材にして賢治が創作したお話でした。盛岡の古い歌に「斗米寅子に馬場松子、石間亀子に騙されるな」という歌があるので、盛岡に三大女狐がいたようなんです。うちの近所にある中津川という川の岸に住んでいた狐のお話で、その下流には城跡公園がありますから、南部の殿様の上流に住んでいた狐のお話なんです。

では、「とっこべとら子」お聞きください。

「おとら狐のはなしは、どなたもよくご存じでしょう。おとら狐にも、いろいろあったのでしょうか、私の知っているのは、「とっこべ、とら子」というのです。

「とっこべ」というのは名字でしょうか。「とら」というのは名前ですかね。そうすると、名字がさまざまで、名前がみんな「とら」という狐が、あちこちに住んでいたのでしょうか。

さて、むかし、とっこべとら子は大きな川の岸に住んでいて、夜、網打ちに行った人から魚を盗ったり、買物をして町から遅く帰る人から油揚げを取りかえしたり、実に始末におえないものだったそうです。

慾ふかのじいさんが、ある晩ひどく酔っぱらって、町から帰って来る途中、その川岸を通りますと、ピカピカした金らんの上下の立派なさむらいに会いました。じいさんは、ていねいにおじぎをして行き過ぎようとしたら、さむらいがピタリととまって、ちょっとそらを見上げて、それからあごを引いて、六平を呼び留めました。秋の十五夜でした。

「あいや、しばらく待て。そちは何と申す。」

「へいへい。私は六平と申します。」

「うん。六平とな。そちは金貸しを業と致しおるな。」

「へいへい。御意の通りでございます。手元の金子は、すべて、只今ご用立致しております。」

「いやいや、拙者が借りようと申すのではない。どうじゃ。金貸しは面白からう。」

「へい、御冗談、へいへい。御意の通りで。」

「拙者に少しく不用の金子がある。それに遠国に参る所じゃ。預かっておいてもらえまいか。もっとも拙者も数々敵を持つ身じゃ。万一途中で相果てたなれば、金子はそのままそちに遣わす。どうじゃ。」

「へい。それはきつとお預かりいたしまするでございます。」

「左様か。金子はこれにじゃ。そち自ら蓋を開いて一応改めくれい。エイヤ。はい。ヤッ。」

さむらいはふところから白いたすきを取り出して、たちまち十字にたすきをかけ、ごわりと袴のもも立ちを取り、とんとんとんと土手の方へ走りましたが、ちょっとかがんで土手のかげから、千両ばこ一つ持って参りました。

ははあ、こいつはきつと泥棒だ、そうでなければにせ金使い、しかし何でもかまわない、万一途中で相果てたなれば、金はごろりとこっちのものと、六平はひとりで考えて、それからほくほくするのを無理にかくして申しました。

「へい。へい。よろしうござります。御意の通り一応お改めいたしまするでございます。」

蓋を開くと中に小判がいっぱいつまり、月にぎら

ぎらかがやきました。

ハイ、ヤツとさむらい千両ばこをは又一つ持って参りました。六平はもつともらしく又あらためました。これも小判がいっぱい月月にぎらぎらです。

ハイ、ヤッ、ハイヤッ、ハイヤッ。千両ばこはみなで十ほどそこに積まれました。

「どうじゃ。これだけをそち一人で持ち参れるのかの。もつともそちの持てるだけ預けることといたそうぞよ。」

どうもさむらいのことが少し変でしたし、そしてたしかに変ですが、まあ六平にはそんなことはどうでもよかったのです。

「へい。へい。何の千両ばこの十やそこばこ、きつときつと持ち参るでござりましょう。」

「うむ。左様か。しからば。いざ。いざ、持ち参れい。」

「へいへい。ウントコシヨ、ウントコシヨ、ウウントコシヨ。ウウウントコシヨ。」

「豪儀じゃ、豪儀じゃ、そちは左程になけれども、そちの身に添う慾心が実に大力じゃ。大力じゃのう。ほめ遣わす。ほめ遣わす。さらばしかと預けたぞよ。」

さむらいは、銀扇をパッと開いて感服しましたが、六平は余りの重さに返事も何も出来ませんでした。

さむらいは扇をかざして月に向って、「それ一芸あるものはすがたみにくし。」と何だか謡曲のような変なものを低くうなりながら向うへ歩いて行きました。

六平は十の千両ばこをよろよろしょって、もうお月さまが照ってるやら、路がどう曲ってどう上ってるやら、まるで夢中で自分の家までやってまいりました。そして荷物をどっかり庭におろして、おかしな声で外から怒鳴りました。

「開けろ開けろ。お帰りだ。大尽さまのお帰りだ。」

六平の娘が戸をガタッと開けて、「あれまあ、父さん。そつたに砂利しょって何しただす。」と叫びました。

六平もおどろいておろしたばかりの荷物を見ましたら、おやお。や、それはどての普請の十の砂利俵でした。

六平はクウ、クウ、クウと鳴って、白い泡をはいて気絶しました。それからもうひどい熱病になって、2か月の間というもの、「とっこべとら子に、だまされだ。ああ欺されだ」と叫んでいました。」

このお話は、「とっこべとら子」というお話で、二話オムニバスになっていて、今日は前半のほうをお聞きいただきました。後半のほうもおもしろいので、ぜひ図書館で借りて読んでみてください。語りで聞きたい方は、ぜひコロナが終わったら私を呼んでください。

さて、これを小学校の4年生で語ったときに、終わった後に子供たちがこの扇が珍しいようで、寄っ

てきました。日本の文化なんですけれども、あまり見たことがないみたいで、開けないんです。横に一生懸命開こうとされて、「あっ、それ壊れるから」と言って、「こここのところで留まっているから、こうスライドさせて開くんだよ」という話を2回ぐらいしたら、子供たちも開けるようになって、喜んで開いて見ていました。

また、そのときに1人のお子さんから「源の大将って何ですか」という質問がありました。後半のほうに「源の大将」といって、かかしに似たような疫病除けの田んぼにかかっているようなものが出てくるんですけど、そのことらしいんですね。源氏と言いかけたら、「あっ、そうですか、義経と頼朝ですね、平家物語読みました」と言われたんです。今の4年生、賢いですね。

【新しい生活様式の中で】

さて、コロナ禍になっておはなし会をするときに変わったことというのと、次のようなことが挙げられると思います。まず、その日の体温とか体調の管理、移動の履歴、接触履歴の管理。それから中止も多く、行く側も、迎える側もドタキャンがあることを覚悟して行かなければなりません。密を避けるために広い会場に変更したりします。それで、ちょっと声が届かないって悩んでいるボランティアさんもいらっしやいます。また、逆に同じ会場でするために定員を減らすということもあります。距離を取ったり、透明アクリル板を置いたりするので、絵本が見えにくい。またマスクをするので、声が余計に届きにくいし、息がしづらい。語り手も聞き手もお互いに表情も見えにくい。それから、手遊びや参加型のお話など触れ合いや声を出して盛り上がるようなものはちょっとプログラムには入れにくい状態です。また、時間を短縮するケースがあります。換気対策でちょっと部屋が寒いか。またあるいは松ぼっくりの絵本を見せた後に、本物の松ぼっくりをみんなの手元前に回して見せるというのもできにくいのかなと思っています。

このほかにもいろいろ感じることはあると思います。それでも、それでもです。子供たちは以前にも増してキラキラした目でおはなし会を待っています。それが私の実感です。そして、そのキラキラの瞳に吸い込まれるとき、語り手も喜びを感じるので。

その読み聞かせ、おはなし会で新しい生活様式の中でできることをちょっと考えていきたいと思うんですけど、まずはおうち時間を楽しもうということです。絵本はコミュニケーションツールなんです。子供と一緒に読み聞かせを楽しんでいけばいいのではないのでしょうか。これを読まなくちゃいけないとかという形ではなくて、ここにこんな絵も描いてあったねなんて、発見しながら一緒に楽しんじゃ

うといいと思います。絵本も一冊一冊買うと結構なお値段になりますので、ぜひ図書館も活用してください。

また、子供の反応とかぬくもりも楽しめると思います。子供らしい突拍子もない反応が楽しめる時期というのは振り返ってみるとそんなに長いものではないんです。

それから、ウェブの利用です。先ほど効果は半分という話をしたんですけど、それでも何もしないよりは、半分あったらいいのではでしょうか。図書館や出版社など読み聞かせ動画がたくさん出ているので、もちろん週一、二回は生の声でも読み聞かせをしていただきたいのですが、時間がないときはこういったものもぜひ活用してもらえればと思います。

そのときになのですけども、ウェブの中では、やっぱりプロの方が読んで、きれいな絵でっていうのもたくさんあると思います。でも、でもです。ライブかウェブかということを考えたときに、私はライブはなくならないと思っています。声というのは振動で、もう体全体で心に響いてくるっていうのは、やっぱりライブの醍醐味ではないかなと思います。

また、ウェブでは相手の状態を観察しているわけではないので、聞き手の「分かった、うん」といううなずきを見ながら語るということはありませんよね。聞き手がうなずき、語り手が呼吸でリードするそのライブ空間、一体感と感動はやっぱりライブに軍配があがると思います。

おはなし会の工夫なんですけれども、先ほど絵本の絵が見えにくいというお話をしたのですが、遠目がきくものを用意する必要があるかなと思います。絵本に比べて、紙芝居は遠くからも見えるようになってくるものです。また、大型絵本であるとか、パネルシアターの活用などもいいと思います。それから、書画カメラというものもあって、絵本の絵をスクリーンに大映しにできるものがあります。それから、絵本を基に手づくりで大型絵本や紙芝居、パネルシアターなどを製作する場合もあると思います。形を変えて製作するときには著作権の許諾が必要になります。書画カメラで大映しにするときにも著作権の許諾が必要になりますので、気をつけてください。

また、ウェブ上で読み聞かせをするということもあろうかと思っています。例えばもう相手が決まっています、決められた空間の中であつたとしても、対象が限定されていたとしても公衆送信権というのに該当してきますので、注意が必要です。

ところで、おうちで気軽に手に入る電子書籍を愛用している方やコロナで導入した図書館も多いのではないかと思います。ここでちょっとその電子書籍と紙の本のメリット、デメリットを考えたいと思う

んですけども、パソコンの画面上で読んだときにはテキストの理解度が低かったという研究結果があるそうです。だから、どっちかという、紙の本で読んだほうが頭に入りやすいということになります。

また、タブレットでは読む速度や理解度に差がなかったという研究結果もあるそうなんです。どちらがよいかちょっとよく分からないですね。

また、紙の厚みを感じるので、脳に入る情報量を考えると、紙に軍配が上がる。電子だと薄くて、軽くて、大容量なので、家の本棚も、家が狭くても場所を取らないという利点があります。また、電子だと画面や文字の大きさを変えたり、分からない言葉をそのまま調べることもできる。その際、画像や動画も活用できます。私みたいになんて老眼が入ってくると、ちょっと字を大きくして見たいなというときに便利です。

また、スマホやタブレットなどではメールなどの機能があり、本を読むのに集中できないということも指摘されています。また、ネットを見ていて気になるのは文章です。もちろんきちんとした文章もありますけれども、よく見るニュースとかトピックなどではキャッチーなタイトルだけつけて、読むと中身がなかったり、甚だしいものはタイトルと記事の中身が乖離しているものまであります。また、誤字、脱字が散見されるものもあります。短いものも多いので、やっぱり長い文章を読む力をつけるには、読解力をつけるには、新聞や本のほうがお勧めだと思います。

【学校での読書推進や学校図書館の活用】

次に、学校でできることというのをちょっと考えてみたいと思います。例えば朝読書、また隙間時間の活用で読書をすすめていく、それから外部の方がなかなか学校に入りにくい状況があると思いますので、子供同士での読み聞かせ体験とか、おすすめの本の紹介などもいいと思います。また、校内放送を使った本の紹介や朗読、それから今GIGAスクールでタブレットが子供たちに配られていると思いますので、タブレット端末を活用した本の紹介や読み聞かせの視聴などもできると思います。ただし、学校の授業でオンラインで使用する場合の著作権とか公衆送信権については、著作権法第35条のところとか、あるいは授業の過程における利用行為と授業目的公衆送信保証金制度というのが新しくできていますので、その確認が必要になります。

ブックリストの配布などでもいいと思います。

それから、やっぱりこの際、学校図書館をフル活用すると思います。

学校図書館は、読書センター、学習センター、情報センターの役割があります。そのほか活用したい学校図書館なんですけれども、先生方に聞くとこん

なお話が上がってきます。

「図書室が狭くて、書棚が古く、木の書棚で、高さも変えられない。すると、背の高い本が入らない。」とか、「NDCを意識した並べ方が難しい」とか、「図書室整備の時間が取れない。」「修理もゼロテープを使っちゃいけないと思っていても、ゼロテープ使っちゃうと思います」とおっしゃった先生もいました。

また、「常勤司書がいないと運営が大変である。」

「司書教諭になっているけれども、動く時間が少ない。」これはですね、司書教諭というのは先生方の中から司書教諭は発令されるんですけども、兼務が多いんですね。先生方の人数は変わらない中で、その中で発令されるので、大抵の先生は担任を持っていたり、ほかのお仕事を持っていたりします。

また、「廃棄が難しい。」「蔵書率のため古い本が廃棄できない。」

「40年前の百科事典がある。予算がないので、更新できない。」これなんですけれども、例えばヒトゲノムが解読されてから生物の目、科、属などの分類表も変わっています。また、地球温暖化で北限が変わったり、地理になると思うんですけども、農畜産物も変わっていますし、平成の大合併もあったので、市の名前も変わっているというのもあると思います。ですから、40年前の百科事典が今使えるかということ、古いデータを子供たちに植えてしまうことになるので、それはとてもよくないことなんです。

また、「図書館は見晴らしがいいところに造ろう」という先生がいて、日当たりがいい、とても窓が広い部屋に造られたというケースがあります。そうすると、実は本が傷むんですね。本の敵はお日様なんです。

また、「台帳管理ができていない」とか、「司書がいないので、利用できる時間が少ない。」図書室はあるんだけど、開かずの図書室になっている」という話も聞きます。

「ネットが通っていない。」「図書館が狭くて、クラス全員が使えない。」

「系統立てて購入ができていない。」

「生徒が読みたい本が少ない」などなど。

まず、学校図書館でできる工夫としては、学校図書館は最小最先端の図書館である必要があります。公共図書館はだいたい、田舎のほうに行くと1市町村に1館というところも多いと思うんですけども、そうなると公共図書館が遠い。子供たちが自分の足で行ける図書館というのが学校図書館しかないという場合もあります。なので、ぜひ学校図書館を整備していただければと思います。本は消耗品であり、更新をしていくものなんです。

また、学校図書館図書標準というのがあるんです

けれども、さっき蔵書率がというのがこれです。学級数に応じて、冊数の標準を決めているものなんですけれども、それを達成するためにデータが古い使えない本を残しているケースもあります。でも、これはよく考えると本末転倒ではないでしょうか。廃棄の参考としては、学校図書館協議会のホームページに学校図書館図書廃棄基準というの載っていますので、ぜひ参考にしてみてくださいと思います。

また、子供が読みたい本と大人が読ませたい本は違います。やっぱり自由読書ということを考えると、まず読みたい本を置いておくというのが重要なと思います。

そして、ぜひ学校図書館の模様替えや改造もこの機会にしてみてもどうでしょうか。長期休みなどを利用して、子どもが喜んで集いたくなるような図書館にするというのは、すてきなことだと思います。実際に私も赤木かん子先生に入っていて、小学校の図書館改造をしたんですけれども、NDC分類に沿いながら子供の皮膚感覚を大事にした分かりやすい配架で、子供たちが喜んで集う図書館ができました。本当に喜んで、走ってくるんですよ。

また、図書館にいる司書教諭と司書の現状についても少しお話ししたいと思います。というのも、当然のことながら管理する人がいないと効果的な運営は難しいんです。学校には司書教諭という先生方の中で図書館の業務を任命される人がいます。司書教諭という資格を学生のときに大抵取ってきている方です。この方は、読書指導とか、図書館の方針を決めたりする方です。12学級以上の学校には必ず配置することになっています。多くの場合は担任や、ほかの業務を兼務しています。11学級以下の場合も一応置くことにはなっているんですけれども、義務づけまでは今ちょっと猶予を置いているようなのです。

司書というのは、教師ではなくて図書館サービスを現場でするために雇用されている人です。2014年の学校図書館法の改正で、この司書を置くことが努力目標になっています。

この公立小学校の図書館の司書や司書教諭の配置状況を見ていただきたいと思います。これホームページでも見られますので、私は岩手なので、岩手のところを抜き書きしたんですけれども、ご興味のある方は自分の県の状況を確認していただいてもいいかと思います。

全国では、今司書教諭の発令率は約7割、それから司書の配置も7割です。昔より改善されてはきているものの、3割の学校にはまだ司書がないという状況になります。首都圏は、全国平均よりも高く、司書教諭はもう9割に配置されています。そして、司書が7割です。

東北の平均は、司書教諭は5割に満たない。そし

て、司書も約5割です。

そして、岩手はなんと司書教諭の配置は3分の1弱なんです。12学級以上は100%なんですけれども、11学級以下の発令率が1%になっています。これは、全国で最下位なんです。また、学校司書の配置率は31%です。青森、岩手を除く東北の4県は、学校司書は6割今配置していますので、それから比べると約半分の配置しかないということになります。そして、この小さな学校の人たちは、割と公共図書館まで遠い学校が多いんです。

また、もう一つお話ししたいこととしては、多くの場合、学校司書は各学校に1人です。ということは、職場で先輩から学ぶ機会がとても少ない職場になります。例えば公共図書館とか教育委員会の部署で毎週集まって、情報交換やお互いの学校を手伝い合ったりしている事例もあります。国や地方公共団体は、資質向上のための研修等を行うことになっています。司書のスキルアップ、バックアップは国や地方公共団体の役割です。

また、学校図書館は狭く、置ける本も限られるので、公共図書館は図書館法で学校教育の援助と家庭教育の向上に資することになっていますので、ぜひ学校図書館のバックアップをお願いしたいところで

【公共図書館での工夫】

次に、公共図書館について考えたいと思います。ウェブ上での読み聞かせについてなんですけれども、例えば地元の郷土民話を活用して読み聞かせ動画をアップするとかっていうのもいいと思います。

大阪府立中央図書館のホームページでは、子どもの本に関する動画リンク集としていろんな図書館だったり、出版社の動画をリンクしています。

また、おうち時間をどう活用していくのか、保護者にPRするというのもいいと思います。

それから、調べ学習の基礎、図書館の利用教育、電子メディアとの付き合い方などをレクチャーするというのもいいと思います。特に調べ学習についてなんですけれども、結構ネットに偏りがちなところがあると思うんですね。でも、ネットの情報というのは正確とは限らないんです。ですから、やっぱり奥付がちゃんとした図書を活用して裏を取るということも重要なことだと思います。

また、先ほどお話しした学校との連携、それから電子書籍の活用、結構これ予算もかかるので、すぐにはいかないかもしれないんですけれども、それから著作権と公衆送信権についてを子供たちやボランティアの方にレクチャーするというのもいいと思います。

子供にとって、平等に図書館サービスを受けられるかどうかは重大な問題なのです。赤木先生が図書館を改装するときに話していた言葉が心に残ってい

るのですけれども、「私たちが子供の頃というのは携帯ショップの店員という仕事はなかった」「今の子供たちはまたいろんな仕事に関わっていく。例えば宇宙旅行の添乗員なんていう職業も現実味を帯びてきている。子供たちが将来生きていくために田舎にしようとも、どこにしようとも、最先端の情報に触れられるように図書館を整備する必要がある」という意味のことをおっしゃっていました。子供たちは、地域の未来を担う人たちでもあります。私は、学校図書館とか、公共図書館の司書の十分な配置と図書更新などの環境整備は国や地方公共団体の責任であると思います。

【3. 11東日本大震災で感じた絵本の力】

さて、読書がなぜ大切か、またコロナの中でどのような工夫ができるか考えてきましたが、絵本の力を考える上で3. 11の東日本大震災でのことにも触れたいと思います。10年前の3月11日、盛岡は停電し、信号は全部止まって、テレビも見られず、津波のことや福島原発のことを知ったのは数日後に電気がついてからでした。その後も内陸はしばらくガソリンがなく、一部の物資も不足していました。けれど、沿岸の被災地のために何かしたいとみんなが思いました。現地ではボランティアの受入れも負担になる状況でもあり、すぐには現地には行けない状況でした。

盛岡でも中央公民館を拠点に「3. 11絵本プロジェクトいわて」がいち早く動き始めました。代表の末盛千枝子さんは、前IBBY、国際児童図書評議会の理事で、上皇后美智子さまの本にも携わられた素晴らしい方です。苦労人で、温かな人柄の方です。雫石でご講演をいただいたときも、私にまで「三つ子ちゃんのお母さんと知り合いで自慢だわ」とお声をかけてくださるような気さくな方です。プロジェクトが立ち上がると、毎日世界中から支援の本が送られてきました。その数23万冊。末盛さんのお人柄による人脈もあるとは思いますが、しかしながら、食べるものも、住む場所もなくなった、そういう状態の中で、食べるものがなければ人は生きられないんですけれども、本はなくても死なないものです。にもかかわらず、世界中の人々がすぐに絵本を送ろうと考えてくださったことは、それだけ世界中の人々が絵本の力を知っている結果だと私は思います。

そして、広域でグループの垣根を越えて、被災地のために何かしたいという思いの人々が集まりました。学生から年配の方まで、最初の頃は毎日のように仕分け作業を行いました。これだけの人が絵本プロジェクトに賛同して集まったというのは画期的なことだったと思います。

やがて被災地でおはなし会をし、絵本カーをつくり、絵本を届ける活動に。この頃になると、おはなしボランティアで平日に動ける人が活動の中心にな

っていきます。私も気持ちはあっても、平日は難しいので、退会しました。10年で720日間、延べ1万2,004人、当初の目標の10年間の支援を経て、今年3月に幕を閉じました。

また、私も先輩に声をかけていただき、ボランティアで現地に入ったのは震災から数か月後のことでした。瓦礫の山から雑草が伸び、通りの片側は家が残っているのに、反対側は土台のコンクリートしかないというような風景でした。

有志で「子育て支援」で保育園に「わらべうたと読み聞かせ」に伺いました。そのときに、子供がまるでご近所で井戸端会議でもするような口調で、「うちも流されたの」と話すのを見て、胸が詰まりました。

また、私は「語りの会 風楽堂」としてチャリティ公演を開催してきました。大人向けに語りの会を開催し、会費や寄附金を被災地の読書活動に役立てていただくとするものです。これまでに16回開催し、皆様からの寄附総額は30万円になります。風楽堂は、私一人の会なのですが、趣旨に賛同し、無償でお手伝いくださった方々には感謝にたえません。寄付先は、おはなしころりんほかいハナミズキのみちの会、熊本地震、ネパール地震、岩泉台風災害などいろいろなところに行きました。主におはなしころりんさんが多かったと思います。なお、ころりんさんは、今回事例発表にもなっていますが、自分たちも被災しているにもかかわらず、避難所で読み聞かせをはじめ、その姿に大人も、子供も涙したといいます。このころりんさんと交流できたことは大きな宝だと思っています。しかし、コロナ禍で昨年からは沿岸にも行けなくなってしまいました。

コロナ禍で支援の足が止められ、人との交流が分断されました。社会は不安や重たい空気で包まれています。新聞でも報道されていましたが、児童虐待が昨年度過去最多の20万件を超えたそうです。前年度より5.8%の増、また国内でコロナで亡くなった方は約1万8,000人です(10/10現在)。比べるものはありませんけれども、東日本大震災では行方不明者と死者の方を合わせて約1万8,400人、この2年間であの震災と同じくらいの方々がご家族を亡くされています。また、後遺症で苦しんでいる方もいらっしゃるでしょう。

東日本大震災では、子供も大人も絵本で癒されました。また、支援する側も絵本を手渡すことで励まし、手渡した側も励まされました。あの瓦礫の山からの復興に確かに絵本は力になったと思います。その経験は、コロナ禍の中でも生かされるのではないのでしょうか。

【宮沢賢治と大地震…世界がぜんたい幸福に】

ところで、宮沢賢治の生まれた年と亡くなった年にも大きな地震と津波があったのはご存じでしょう

か。生まれたのは明治29年です。その年6月15日、明治三陸大津波がありました。死者は2万2,000人とされています。その年の8月27日、宮沢賢治は花巻川口町に質屋の長男として生まれました。その4日後、陸羽大地震がありました。ほかに大洪水、大雨が相次ぎ、死者は多数だったそうです。

東日本大震災から10年、それでも復興はまだ道半ばです。明治三陸大津波も復興までどれほどの時間がかかったことでしょうか。賢治も育っていく過程で、小さいながらもいろいろなことを耳にし、その人柄や考え方に影響を受けたに違いありません。また、亡くなったのは昭和8年、1933年、この年3月3日に昭和三陸大津波が発生しています。その年の9月21日、37歳で永眠しました。

賢治が亡くなる時法華経をお父さんに託したという話は有名です。また、有名な「雨ニモマケズ」は、亡くなる2年前に手帳に書かれていたもので、発表しようと思って書いたものではありません。賢治の死後に発見されたものです。その最後のページは「南無妙法蓮華経」で終わっているのをご存じですか。「雨ニモマケズ」は賢治の祈りのように感じます。

賢治は日蓮を信仰していました。日蓮の「立正安国論」は名文として知られていますが、冒頭次のように書かれています。「旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地夭・飢饉疫癘・遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり」。

近年より近日に至るまで天変地夭、これは大自然の災害です。大地震とか、大津波がこれに当たると思います。飢饉疫癘。疫癘は、疫病のことです。新型コロナウイルスのような感染症の病気は疫病に当たります。こうして見ると、現代に似ているような気がします。

その「立正安国論」の中で、私の好きな一節があります。「汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を禱らん者か」。あなたは、一身の安堵を願うなら、まず四表の静謐…四表というのは、東西南北のことです。ですから、周囲の平穏、世界の平和を祈ることが必要ではないのかという言葉です。

これを聞いて、宮沢賢治の有名な言葉を思い出した方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そう、「農民芸術概論綱要」序論にある「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という一節です。この言葉は、今とても大切な言葉だと私は思います。

東日本大震災で世界中の人々から被災地の子供に絵本が届いたように、それに子供も大人も癒やされたように、このコロナ禍の中、未来を担う子供たちに今私たちができること…それは絵本を手渡し、読書とともに世界中の知恵を手渡し、またたくましく生きる力を育むことではないのでしょうか。それが個

人の幸福と世界全体の幸福につながっていくことを願っています。

ご清聴ありがとうございました。

■事例報告 I

「一関市立図書館における児童サービス

～新しい生活様式への対応と学校連携～

舩屋 藍 氏（一関市立一関図書館 主任司書）

○舩屋 藍氏 一関市立図書館における児童サービス～新しい生活様式への対応と学校連携～」について、事例報告させていただきます。

一関市立一関図書館主任司書の舩屋藍です。よろしくお願いいたします。

本発表の内容についてです。1 一関市立図書館の概要、2 令和2年度一関市立図書館で実施した児童サービスについて、3 学校との連携について、最後に、まとめとなっております。

初めに、一関市について御紹介します。当市は南北に長い東北地方のほぼ中央、岩手県の南に位置し、首都圏からは約450キロメートル、盛岡市と仙台市の間地点にあります。人口は約11万2,000人です。市域は東西に約63キロ、南北に約46キロあり、岩手県内で第2位の広さとなっております。気候は、東北地方では比較的温暖な地域となっております。宮城、秋田の両県に隣接し、市内には3県にまたがる栗駒山や狛鼻溪、巖美溪などの名勝地、一関温泉郷などの観光地があります。世界遺産登録のまち平泉や三陸方面への観光拠点ともなっています。岩手県南から宮城県北の方の生活圏となっており、市域をまたいだ往来が多いことなどから図書館の利用者登録は、住所を問わず誰でも登録可能としていることが特徴です。

一関市立図書館は、広い市域に8つの図書館が点在し、3台の移動図書館車も併せ市内全域へのサービスを行っています。各館で特色ある資料収集を行っており、蔵書総冊数は全館合計で95万3,696冊、雑誌440タイトル、新聞24紙を所蔵しています。令和2年度の個人貸出点数は73万2,310点、利用登録者数は5万8,798人です。

次に、新型コロナウイルス感染拡大状況下における一関市立図書館の対応についてです。一関市立図書館では、新型コロナ対応に当たり、ロードマップを作成しました。この図は、その簡易版です。感染拡大状況に合わせて随時更新し、市内8館で共有することで連携体制

を取ってきました。サービス提供内容については、市内の感染拡大状況のほか、隣接する岩手県南及び宮城県北地域の状況にも合わせて変更してきました。

令和2年度において、岩手県及び一関市が緊急事態宣言の発令下にあったのは、第1回目の緊急事態宣言時のみでした。完全休館としたのは、令和2年4月19日から5月10日まで、この際に後述の日本図書館協会のガイドラインにのっとり、ロードマップを作成しました。全国の図書館の中では比較的感染症の影響を受けず、一定程度の図書館サービスを継続することができたと言えますが、入館者数は前年度比で33.1%の減少となりました。

令和2年度一関市立図書館で実施した児童サービスについてです。感染症対策を行った上で実施することができたものを中心に御説明いたします。初めに、感染症対策の実施に当たり、参考としたものについてです。基本としたのは、日本図書館協会による『図書館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン』です。令和2年5月14日以降随時更新されています。

また、全国の図書館の状況や先進事例については、日本図書館協会ホームページの『新型コロナウイルス感染症への図書館の対応事例』、saveMLAKの『COVID-19の影響による図書館の動向調査について』の2つを主に参考にさせていただきました。このほか書籍なども参考に、安全に配慮しつつ、可能な限りの図書館サービスを実施してまいりました。

感染拡大状況下において一図書館サービスを継続するに当たり、全国の図書館の先進事例を大変参考にさせていただきました。利用者には何とかサービスを届けようと奮闘し続け、その貴重な情報を共有して下さった皆様にご場を借りて心からお礼を申し上げます。また、情報収集と発信を続けて下さった各団体の皆様にも重ねてお礼を申し上げます。大変心強く感じました。

実際に行った感染症対策についてです。感染拡大状況に合わせ、矢印の順に対策を強化

していきました。共有スペースの定期的な消毒、飛沫防止ビニールやアクリルパネルの設置を行い、また閲覧席を半分程度に減らし、席同士の距離を確保しての使用としました。閲覧席は、緊急事態宣言時のみ全て使用禁止としましたが、その後は使用を再開しました。そのほか手指消毒液の設置、閲覧資料をそのまま書架へ戻すことがないよう返却台の設置、マスク着用及び滞在時間短縮の呼びかけを行いました。これらは、第1回目の緊急事態宣言明けから令和3年9月の現在に至るまで継続しています。

密集を避けるため、カウンター及び自動貸出機の前には、写真のように足形マークを設置しました。視聴覚ブースなどは利用終了の都度消毒し、館内の換気を常時行い、換気が難しい飲食スペースなどは一部閉鎖しました。

非接触型体温計の設置は、予算の都合上、令和3年度からとなりました。

館内のおはなし会での感染症対策は、次のとおりです。会場を換気可能な部屋へ変更、飛沫防止アクリルパネルの設置、おはなし会を行う職員のマスク着用を行いました。また、整理券を配布し、定員制とし、当日は検温と緊急時連絡先を把握するための参加者名簿の作成も行いました。

これら対策を行った上で、令和2年度は全館で425回のおはなし会を実施し、延べ6,786人に御参加いただきました。なお、参加人数は前年度に比べ約30%減となっています。

図書館主催事業で実施した感染症対策についてです。実施した事業名を黄色い囲みで示しています。来館型の事業については、滞在時間の短縮、距離の確保、使用する場所を分散するなどの対策を行いました。例えば中学校の調べ学習では、滞在時間の短縮のため、あらかじめテーマに沿った資料を準備したり、調べたいテーマごとに部屋を分散させることで密集を避けました。そのほか例年図書館内を会場にしていた事業を、3密を避けるため、市民センター体育館などの広い会場に場所を移して開催したものもありました。

いずれの事業も当日は検温、手指の消毒、マスクの着用、距離の確保に努め、調べ学習以外の事業については感染症対策アプリ「もしサボ岩手」への登録の呼びかけ、参加者名簿の作成を行いました。参加者からは、感染症の影響で外出を控えている中、図書館でのイベント開催がありがたいとの声もあり、参加人数は決して多くなくともふだん以上に開催する意味のある事業になったと感じられま

した。

図書館主催事業のうち訪問型の事業については、こども園、小学校、中学校、児童クラブでのおはなし会やブックトークを実施しました。感染症対策として、少ない人数で参加してもらえるようクラスごとなどに分けてもらう、訪問する職員の手指消毒とマスク、フェイスシールドの着用、開催場所を体育館など広い場所に変更するなど、感染症対策について事前に訪問先との打合せが必要でした。事前に打合せを行うことで訪問先にも安心して迎え入れていただくことができます。図書館への来館が難しい状況下でより多くの児童生徒に図書館サービスを届ける方法として、訪問型サービスの重要性が増していると感じました。

また、感染症のガイドラインなどの情報提供や、感染症対策を行った上でどんな図書館サービスが提供可能か、学校や幼保施設と直接相談できるよいタイミングにもなりました。そのほか非来館型の事業として、毎年開催している室根図書館おすすめ本POPコンテストがあります。令和2年度は表彰式を中止し、学校へ表彰状の授与を依頼する形で実施しました。

一関市立図書館では、子育て支援課との共催で乳幼児健診時の絵本配布事業及び読み聞かせを行ってきました。令和2年度は、感染症対策として図書館の紹介や読み聞かせを簡略化、時間を短縮して実施しました。その際、参加する職員は手指を消毒し、マスク、フェイスシールドを着用しました。また、対応職員を増やすことで保護者同士が密にならないようにしました。

このほか各年齢に向けたブックリストの配布も継続しました。一関市立図書館では、年齢別に計11種類のブックリストを発行しており、これらを乳幼児健診の機会や幼保施設、小中学校、高校などの協力を得て、令和2年度も配布しました。

非来館型サービスとして、移動図書館サービスと団体貸出サービスを継続しました。実施に当たっては、訪問する職員の手指消毒、マスク着用、移動図書館車内の換気を行ったり、混雑時は人数を制限して3密を避ける対策を行いました。この際、訪問先との打合せが重要となりました。訪問先の状況によっては、サービス提供が困難な場合もありましたが、3密を避けて個人貸出を団体貸出に切替えたり、あらかじめ図書館職員が選書した資料を届けるなどの方法に変更するなどして、

可能な限りサービス提供を継続しました。

これら訪問型のサービスを継続することができた結果、入館者数及び本館での貸出点数は大きく減少しましたが、移動図書館及び団体貸出については、比較的減少幅が小さく、感染症の影響下でも図書館サービスを届ける方法として、非来館型サービスの重要性をより感じる結果となりました。

このほかオンラインで利用できるサービスとして、いちのせき電子図書館とナクソス・ミュージック・ライブラリーを導入しています。いちのせき電子図書館サービスは、令和2年12月に開始しました。子供向け資料としては、絵本、児童書、家庭学習に役立つ資料や、授業で活用できる『一関市について知る資料』などを用意し、令和2年度は434人の登録者がありました。クラシック音楽を中心に約230万曲を自宅から試聴できる音楽データベース、ナクソス・ミュージック・ライブラリーは、令和元年度から導入しています。これらオンラインで利用できるサービスについて、今後更に充実させていくこととしています。

次に、一関市立図書館の児童サービスの特徴の一つである学校との連携について紹介します。令和2年度は、学校図書館ネットワーク事業、読書普及員を通じた学校図書館支援、移動図書館サービス、団体貸出サービス、学校図書館システム導入支援などを実施しました。

まず、学校図書館ネットワーク事業について紹介します。学校図書館ネットワークは、教科書の単元に合わせた資料や児童生徒からのリクエスト資料を市内小中学校へ団体貸出する事業です。対象となる資料はコミック、視聴覚資料を除く市立図書館の蔵書全てです。教科書の単元に合わせた資料のほか、郷土資料や修学旅行関係資料の利用が多く、また点字資料やマルチメディアデジターなど学校図書館では購入が難しい資料も貸出ししています。

右上の写真に写っているのが学校支援専用の図書です。学校からのリクエストが多い本を複本で用意しています。資料の利用は、後ほど御説明します各小中学校の読書普及員を通じて行われ、授業や学校図書館の展示、学級文庫などに活用されています。中段と下段の写真は、市立図書館の本を使って学校図書館で様々なテーマ展示が行われている様子です。

この学校図書館ネットワークについて、令和2年度は図書館休館期間以外は事業を継続

することができました。その結果、令和2年度は市内小中学校へ4万3,897点の貸出しを行うことができ、学校図書館の閉鎖や移動図書館の訪問中止が相次ぐ中でも、ネットワークを通じて子供たちに資料を届けることができました。

次に、読書普及員を通じた学校図書館支援について紹介します。一関市では、市立小学校28校、市立中学校16校、計44校の全てで兼務を含め27名の読書普及員を配置しています。読書普及員は、教員とともに学校図書館の運営に当たり、学校図書館の整備や読書推進、授業の支援などのほか、学校図書館ネットワークの運用も行っています。

一関市の特色として、この読書普及員が週1回程度、市立図書館へ勤務していること、それにより連携を図っていることが挙げられます。読書普及員の市立図書館員の勤務は、令和2年度も図書館休館中以外は継続することができました。市立図書館職員からは、通常時は学校図書館運営の支援、情報提供、修理やブックコートの技術支援などを行ってききましたが、令和2年度はそれに加え、学校図書館での感染症対策や各種ガイドライン、全国の事例などの情報提供を行って支援しました。また、読書普及員同士が集まり、ほかの学校図書館の開館状況、感染症対策についての情報交換ができる貴重な場にもなりました。

このほか学校との連携として、移動図書館サービスや団体貸出サービスを継続しました。それぞれの学校の感染拡大状況により移動図書館車の訪問が中止となった学校もありましたが、令和2年度は小学校39%、中学校19%へ移動図書館で訪問し、貸出しを行いました。訪問の際は、職員の手指消毒などのほか、クラス別に人数を減らして利用してもらうなど、学校と感染症対策の協議を行った上でサービスを実施しました。同様に公用車でも、感染症対策を行った上で、小学校43%、中学校19%へ訪問し、貸出しを行いました。また、移動図書館車と公用車で個人貸出しを行っていた学校のうち、感染症対策として団体貸出へ移行した学校がありました。あらかじめ職員が選書した図書をコンテナで貸出しすることで、個人で本を選ぶ楽しみは減ってしまいましたが、感染症対策が取りやすくなりました。ただし、図書館の事前準備が必要となり、時間と人手を要するため、大量の本は用意できないなどの難点もありました。

これらを組合せ、図書館休館期間以外はサービスを継続した結果、令和2年度は移動図

書館車で2万6,037点の個人貸出しを行うことができました。

このほか一関市では、新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金を活用し、小中学校図書館への学校図書館システムの導入を開始しました。市立図書館では、資料登録などの構築作業の支援、導入後の運用の支援などを行っています。主に前述の読書普及員を通して各地域の小中学校図書館からの相談に応えています。

また、小中学校教員の初任者研修へ市立図書館職員が講師として参加することも行いました。図書担当ではない教員にも学校図書館や市立図書館の活用方法をPRするよい機会となり、今後、感染症対策を行った上でどのような連携事業を行うことができるか、教員の皆さんと一緒に考えてもらう足がかりとなりました。

以上、令和2年度に実施した一関市立図書館の児童サービスについて御紹介いたしました。感染症対策下での開館、事業実施に当たっては、市内及び周辺地域の感染拡大状況に合わせどのように感染対策を行うかの情報収集を行い、対応を共有することが重要でした。

また、利用者からは現在どのような対策を行っているのかと問合せを受けることも度々あり、対策が分からないと来館できないと感じる方もいらっしゃったようでした。自館がどのような根拠に基づき、どのような対策を行っているのか、館内掲示だけでなくホームページや広報等で発信することで利用者に安心して利用してもらえる図書館になると思われま

す。また、非来館型サービスの重要性が増したことを受け、幼保施設や学校との連携が児童サービス継続の鍵となりました。各団体との連携、物流のネットワークをつくっておくことで、個人での図書館来館が難しい状況下でも子供たちが日常過ごす場に図書館が出向き、あるいはネットワークを通して図書館サービスや資料を提供することができました。

また、情報提供などを通じて学校図書館を支援することも重要でした。図書館職員の情報収集能力を生かし、各団体の活動継続を支援することで子供たちの日常の場そのものを守る一助となることができたと考えています。

事例発表は以上となります。新しい生活様式に対応した児童サービスとはどんなものか、模索しながらの一関市立図書館の1年間の活動が皆様の御参考になれば幸いです。日々状況が変わる中ですが、今後も全国の図書館の

皆様と情報共有しつつ、可能な限りの図書館サービスを行っていただけるよう尽力を続けたいと思います。

御清聴いただき、ありがとうございました。

■事例報告Ⅱ

「多様な取り組み方法への挑戦～コロナ禍でできることを探る～」

江刺 由紀子 氏

(特定非営利活動法人おはなしころりん理事長)

○江刺由紀子氏 皆さん、こんにちは。大船渡市のNPO法人おはなしころりんの理事長、江刺由紀子と申します。今日は、「新しい生活様式の下での児童サービスの在り方」という研究主題に対しまして、事例報告「多様な取り組み方法への挑戦～コロナ禍でできることを探る～」と題しまして、皆様にお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

本日の内容です。まずは、私どもの団体についての紹介をさせていただきます。その後、コロナ禍になる前の活動、そしてコロナ禍になって活動するにおいて課題になったこと、またその課題を克服して新しい事業を幾つか立ち上げておりますので、その辺を御紹介したいと思っております。

いつも私どもが新しい活動、また自分たちの今やっている活動を見直すときに念頭に置いていることは、そこに書かれていることです。この地域にとって必要なことって何か、それも近々で必要なこと、また中長期的にこの地域に必要なことは何かということを考える。そして、自分たちがやりたいこととは何なのか、そのやりたいことの中で、できることは何なのか、この3つのことの狭間で今自分にできることは何だろうというふうに考えていております。また、社会はどんどん変わっていくものですから、過去の活動をそのまま継続するのではなくて、目的は変えずに活動のやり方を変えていきながら、よりいいものにしていきたいというふうに思っています。子供たち、またここに住んでいる住民の人たちの心に寄り添いながら読書を通じてまちをよくしていきたいと思っておりますNPO法人であります。

さて、まずは私どもNPO法人おはなしころりんの団体の紹介に移ります。正会員は44人、ほとんどが大船渡市内の人間です。44人のうち3人が男性になっています。賛助会員は100人ちょっと、7割近くが女性です。そして、事務所スタッフは10人、有償スタッフですが、10人おまして、全員女性ということになります。御紹介したように女性が多いものですから、女性とNPO法人、またジェンダーと防災など女性に関わる活動での講師依頼が少なくないところでもあります。女性として地域でどんなふうやっていくのかというお話

をすることが多いです。

私どもの拠点となっているのは2つ箇所があります。一つは、地域交流図書室おはなしサロン。図書室なんですけど、おはなしサロンということで、おはなしをしながらにぎやかに本を借りる場所、小さい場所ではありますが、高齢者も遊びに来ますし、小さい赤ちゃんを連れてお母さん方、また小学生たちが小学校を終わってから来たりなどしてとてもにぎわっている場所でもあります。

もう一つは、大船渡市の建物です。大船渡市防災観光交流センター、愛称としておおふなぼーと呼んでおりますが、ここの2階の運営と、それからお部屋の管理を業務委託いただいております。2階の事務所がおはなしころりん第2事務所となっております。この2階では、交流事業をメインにしておりますが、交流事業の中で本を通じた交流というものも多種多様そろえているところであります。

さて、団体の概要です。2003年に任意団体を立ち上げました。最初は、この大船渡市の地域の子供たちが本を好きになって豊かな人間形成に少しでもお手伝いできないかというふうな気持ちから立ち上げました。まるっきりの地域の読書活動の推進一本でやりました。立ち上げました。その後、2016年には読書の普及活動、また高齢者の活躍の場と生きがいづくり、そして地域コミュニティの活性化、この3本の課題に取り組むとしてNPO法人化いたしました。

活動内容は、そこに書いているような様々なことを行っております。そのときに新しく活動を立ち上げたり、またこの活動はもう不必要かと思うものはやめたりなどしながら、その年、その年でいろんなことを活動しておりますが、そこに出ているのは毎年続けているものです。読書を通じたものがほとんどで、子供に関わるもの、また高齢者に関わるもの、また本を通じた交流事業など目的によって少しずつ内容が変わっているところであります。

さて、コロナ禍以前の活動の概要というところをお話いたします。ここは、岩手県大船渡市ということで、東日本大震災の被災地に当たります。被災の前と後では活動内容が随分違いますので、

まずは震災以前の活動をお伝えいたします。読み聞かせ活動、絵本の読み聞かせを月に平均30回は行っております。ほぼ毎日どこかで読み聞かせしておりました。図書館であったり、小学校であったり、児童養護施設であったりといったところです。

そのほかに民話を掘り起こしまして口伝の民話などの原稿を書いたり、中学生、高校生に絵を描いていただきながら紙芝居を作っております。大船渡市内の紙芝居のほかに創作の紙芝居や、岩手県内の紙芝居なども作り、毎年少なくとも1作品ずつ作っております、ただいま14作目ができたところであります。

ほかには絵本作家による講演やワークショップ、絵本作家と身近に接することで本に対する興味が増えていけばいいなどと思って、このような企画もしているところであります。ここ2年ほどはアメリカの絵本作家の方が日本に住んでおりますので、その方とのオンラインを使つての交流などをしております。

さて、東日本大震災が2011年3月11日に起きました。ここは、大船渡市の大船渡町の中心街の様子です。その震災発生してから2週間後から既に私どもは避難所で読み聞かせや本棚づくりを行っておりました。これは、読書活動の推進もですが、それよりは本を通じて皆さんがどんな様子なのか見に行ったり、子供の話の聞いたり、同じ気持ちになって笑顔をつくってみたり、また私どもはそばにいれませんが、本をそばに置いてほしいという思いから中古本を集めて、それから支援物資の入ってきた段ボール箱を本棚にいたしまして、本棚づくりなどをいたしておりました。このあたりから読書推進のみではなく、違った本を通じた地域のために何かなくてはという気持ちが起こってきたのであります。

そういう中で、自分の活動をちょっと整理を試みたのがこちらです。すると、このようにまとまりました。いろんな年代、いろんな年齢の方々に絵本の読み聞かせやらをして、そして皆さんが笑顔になって本が楽しいということを実感していただいて、元気が湧いてくるという活動を自分たちは行ったんだというふうに分析いたしました。その上で、楽しいという気持ちを一緒の場で、一緒の空気を感じることで気持ちを分かち合つて、その気持ちを分かち合うことで地域の子供たちや住民が心がつながっていくということをしてきたのだというふうに後から分かりました。これは、子供たちや高齢者の方々に読みながら、それを、そのことを教えてもらったような感じがいたします。

今後もこの2つが大船渡には必要だということ

はひしひしと思いましたので、活動の二本柱をしっかり立てました。一つは、変わらず読書活動の推進、そしてそのほかに地域コミュニティの再生支援ということです。固い言葉になるので、もうちょっと柔らかく言語化して、皆さんにはスローガンとしてこのように「本を窓に世界を知る」、そして「本の力で心をつなぐ」、このような表現でもって活動のPRをしております。

これが事業構造です。ビジョンやミッションに向けて様々な活動をしておりますが、それをつなぐ、読むことで人をつなぐ、気持ちをつなぐ、まちをつなぐということで、「読みつなぎ」という言葉を提唱して、読んでみんなでつながっていくと呼びかけております。

そして、最終的には大人も子供も笑顔で元気で自分の夢に向かって頑張れる、本を通じてその気持ちが起こってくる、そういう地域社会の実現を目指しているところです。これがうちの団体の事業構造となっております。

この大船渡には様々な課題がありますが、全部に着手することは不可能ですので、3つの課題を取り上げております。その課題を解決しようと取り組んでいるところです。その課題3つはこちら、子供の「生きる力」を育むための読書活動、また高齢者がたくさんおりますので、高齢者の活躍の場や生きがいづくり、そして津波でばらばらになってしまった地域コミュニティ、この地域コミュニティの再生・維持、活性化などを本を通じて読んでつながることで解決していきたいというふうに考えているのがうちの考えであります。

その読みつなぎで元気になったならば、それってすばらしいなと思います。読んでつながる読書活動でもって地域が元気になる、それを大船渡の強み、大船渡の魅力にしたいというふうに考えています。岩手県だったら大船渡が面白い読書活動しているよね、まちづくりにまで入り込んでいけるよねというふうに、大船渡といえば読書というふうに言われるようになりたいと思いながら、今その道の途中であるというふうに自覚しているところです。

さて、時代によって変わっていく活動ですが、それをまとめたのがこちらになります。2003年に立ち上げて、震災が起こり、二本柱で活動を続けるうちに、2015年に国連の防災世界会議が仙台で行われまして、そこで防災枠組みが策定されたもので、それは被災地としては必要なものと考えましたので、防災ワークショップも行っているところです。市内の様々な小学生が私どものところに参りまして、防災ワークショップを行っております。そのときに紙芝居を通じたり、本の紹介なども忘れておりません。

そのあたりを続けているうちに法人化する必要性がありましたので、感じましたので、法人化し、復興支援というところは10年目で終わりにし、地域解決のために頑張るところということで、本を通じた復興支援事業は、本を通じた様々な活動というふうに名前を変えております。そして、昨年度からのコロナ禍となったという流れであります。

コロナ禍での活動において、皆さんどなたも感じている課題ですが、それをそこに書いてみました。まずは、直接的に対面ができないということです。目の前で顔を見ながら、顔を近寄せながらの対面での活動ができなくなった。そして、マスクを着用するためにこちらの表情も、また子供たちや高齢者の方々の表情も感じ取ることができなくなった。そして、イベントがなかなか開催が困難になった。人が集まったとしても、ソーシャルディスタンスを保たなくてはいけないので、イベントの中での一体感というものなかなか感じるのが難しくなった。また、こちらの運営側といたしましても、消毒作業とか検温、それから保健所に提出するかもしれないために名前を書いたり、連絡先を聞き出したりするなど運営側の仕事が増えた、負担が多くなったということなどがすぐに皆さんも思い浮かぶかなと思います。

これらの課題を何とか解決しながら事業を行うにはどうしたらいいかといういろいろ考えました。そして、コロナ禍で立ち上げた新たな事業4つについて、今日は皆さんに御紹介させていただきます。

まずは、文通活動です。本を読む方々は、文章で気持ちを表すのが上手というか、手紙を書く方が多いなところから、昔懐かしい文通という言葉を取り上げて、「おはなしころりと文通しませんか?」、事業名は「お便り やりとり 思いやり」というふうにいたしました。つまり、会えなくても文通で手紙をやりとりしながら心をつないで、それが励みの一部になって毎日の暮らしが明るくなればいいな、お互い思いやりの持った文章のやりとりで皆さんを元気づけるかなというふうに思いました。外に出かけなくても、外に出かけられなくても、家で交流が図れるのじゃないか、文章での交流を図るということで、文通活動を去年の5月から行っております。

今は参加者24人います。ほとんどが大船渡市内の方ですが、市外の方も、市外で県内の方も四人、五人いらっしゃいます。そのほか岩手県外の方も一人いらっしゃいます。この手紙のやりとりしてくださる方々の年齢は、小さいお子さんでは6歳から、そして高齢では89歳まで男性も女性も、そして御病気の方も、障がいのある方も、様々な方がお手紙をくださって、それに対して私どもも手紙を書いております。スタッフの中で1人担当者

を決めて、1対1での手紙のやりとりとなっております。

私も受け持っている中で、お一人は障がいのある方、もう一人は盛岡の方で、その人によって2週間に一遍手紙をくださる方から、二、三か月に一遍手紙をくださる方、申し込まれた方々の皆さんのやりやすいスタンスで進めております。

どのようなことが書いているかということ、日々の日常を感じることであったり、また本のことを書いてくださる方もありますし、自分の悩みであったり、あと自分史を書いてくださる方などもあります。お会いしたことがないんですけれども、会ってみたいといってわざわざ訪ねてこられたお子さんの方もいますし、高齢者の方もわざわざ会いに来て、うちのスタッフと顔合わせをしたりしています。とても温かい心の交流が図れるなと思っています。

次は、軒下古本市です。こちらは、おはなしサロンを緊急事態宣言が出たときには閉室にしているものですから、いつもいらっしゃる方々がまだ開かないのかい、まだ開かないのかいというふうにはいらっしゃるものですから、お部屋は開いていないけれども、外で本を読むことができるようにと思ったのが最初であります。おはなしサロンとその隣のおはなしころりんの事務所、この軒下に平日常時300冊は並べているところです。赤ちゃん用の絵本から書籍、実用本、それから文庫まで置いております。無料で差し上げる本から10円でお譲りする本、100円で中古販売する本などいろいろそろえております。通りすがりにここに寄って、本を選んでいく楽しみというもの地域の方々には定着した模様で、毎日いろんな方々が事務所の前に立っておられるのをよく見ております。

これが定着したものですから、おはなしころりんでは古い本要りますかという、皆さんからよく声をかけていただきます。そして、寄贈していただいております。つまり、とてもいい本の循環ができています。地域の方々の不要な本をうちに寄せていただき、そして必要な人たちが本を頂いていくという。本が地域でうまく循環しているという、そして皆さんにとって役立つし、楽しいし、好きな一冊、また掘り出し物など見つけたりして、直接感想など聞くと皆さんとってもうれしそうです。これも成功例だなというふうに思っているところです。

次は、オンラインです。若いお母様方、お父様方、子供たちはオンラインでのやりとりが得意な方も少なくありませんので、今お見せしているのは春休み親子でZoom料理教室、本とはちょっと違いますけれども、料理教室なども行っております。今後はオンラインで紙芝居を読んでいる読み聞か

せをお届けしたりということもできるかなと思っています。コロナ禍では、こういうことの発信も非常に有効だなと思っていますので、このオンライン教室、月に一遍か2か月に一遍ずつ料理教室のほかにもこれから広げていきたいというふうに考えている事業であります。

そして、最後はこちら、新聞紙上での本の紹介です。これも去年の5月、6月ぐらいから始めたところ。地元の新聞東海新報、こちら隔週で火曜日に掲載しております。毎回2冊ずつ、そして2冊ずつの本の表紙と、それから文章は二百二、三十字掲載してもらっています。そのコーナーのタイトルは「絵本の世界」、サブタイトルとして「あかちゃんから大人まで」となっております。9月28日現在で34回、2冊ずつですので、68冊紹介し終えたところであります。「あかちゃんから大人まで」ということで、このときは未就学児童から小学校低学年向けの夏の絵本を紹介しております。そのほか例えば9月は、宮沢賢治の亡くなった月でありますので、大人も楽しめるような宮沢賢治の本を紹介したり、8月は終戦記念日がありましたので、戦争に関わるお話にしたり、また3月には3.11、防災であったり、震災の伝承に関わる本などを紹介しております。もちろん中学生や高校生向け、また中学生から大人向けもいけるかなみたいな、いろんな本を紹介しております。写真、絵本から小説まで、そのようなものも紹介しているのですが、これも好評でありまして、直接本を紹介することができないけれども、新聞紙上での紹介でもって市民からの反応はこの本読んでみたとか、この本を見てみたいんだけど、おはなしサロンに置いてあるっていうから、ちょっと見せてくれとか、毎回読んでいるよなど、いろんな方々から反応があるところです。こういうふうに本を紹介するというのもありだなというふうに思っています。

そして、皆さんからはせっかく今まで続けてきたので、図書展をやってもいいのではないかとか、絵本の世界の書評をざっと並べて展示してもいいのではないかなど、いろいろなアイデアも寄せてくださる市民もいて、大変ありがたく思っているところです。

コロナ禍であってもできることはやっていく、リスクが小さいところから始めて、どんどん充実するようにボリュームを膨らませていくなどしながら活動を今後もコロナ禍にあっても進めていきたいと思っているところです。

その工夫を自分だけではなく、市民の意見からも、市民のアイデアも取り入れながら、みんなで一緒にやっていくことで子供たちにもいい影響があるのかなというふうに思っています。広い意味で

の読書推進になるのではないかとというふうに考えます。

「つながれ笑顔!」、「ひろがれ元気!」、これが本でできるように今後とも頑張ってもらいます。

今日はつたない話で大変恐縮ですが、最後まで御清聴いただきまして誠にありがとうございました。

■事例報告Ⅲ

「ウィズコロナ時代の児童サービス～岩手県立図書館の取組～」

沼宮内 望 氏（岩手県立図書館指定管理者 司書）

○沼宮内 望氏 こんにちは。「ウィズコロナ時代の児童サービス～岩手県立図書館の取組～」について発表させていただきます。

岩手県立図書館指定管理者サービス第1課児童サービス担当の沼宮内望と申します。よろしくお願いいたします。

私は、2016年から現在まで岩手県立図書館で5年間児童担当をしておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大によって、本当にいろいろなことが変わってしまいました。当たり前になっていたことができなくなる、大人でもこんなに不安を感じているのですから、子供たちのストレスは計り知れません。今図書館ができることは何か、岩手県立図書館の取組をご紹介します。

今日は、このような流れでお話をしていきます。まず、岩手県立図書館のサービス制限について。県立図書館では、昨年2020年2月28日に一度全てのイベントの開催が中止または延期となりました。利用者同士の距離を一定程度保つため、閲覧席を減らし、不特定多数が使用する機器類も一部利用できなくなっています。さらには図書館サービスも制限することとなり、1度目が2020年4月25日から5月6日、そして2度目が岩手緊急事態宣言の実施に伴い今年2021年8月16日から9月17日まで図書館への入館ができなくなりました。そのかわり電話での事前予約による貸出窓口が設置され、サービス制限中でも資料の貸出しやその他一部のサービスは利用できるようになっています。

5月14日、日本図書館協会からガイドラインが公開されます。これは一部抜粋したものです。皆さん既に取り組まれていることと思いますが、この⑤番、読書会等の行事の開催に当たって実施の必要性を判断する基本的事項、主催者も参加者もマスクを着用することを義務づけることなど、このガイドラインに沿った形でイベントを開催しています。正直イベントできるかなと不安でした。こういう場合はどうしよう、そんな心配が次々に浮かび、なかなか企画できずにいました。

そんなとき、サービス制限が明けて利用者さんが「図書館が開いてくれてよかった」と言ってくれたのを思い出しました。その方はお母さんなんです、「閉まっている図書館を見て、子供が悲しそうな顔をしたんです」と言って、お母さんまでつらそうな顔をされたんです。学校がお休みになり、友達にも

会えない。そんな中で、やっと来られた図書館が閉まっていた。とてもがっかりして、「こんなに大変なことなの、怖いな」と思わせてしまったかもしれません。

図書館が開いている、変わらずに見知ったスタッフが笑顔で迎えてくれる。それを子供たちは求めている。そう感じました。この未曾有の事態に今までにないような特別なことをしなければと思っていましたが、まずは子供たちが図書館はいつもどおりだと安心できるようにしてあげなくちゃ、そう思うようになりました。

それでは、そんな実際の取組についてお話ししていきます。(1)番、情報提供から。当館ホームページにリンク集を掲載。2021年2月28日に文科省が全国の小学校等に一斉臨時休校を要請、これを受け、岩手県内の市町村立小中学校も3月2日から臨時休校となります。おうちで過ごす時間が増えた子供たちのために自宅学習の支援サイトや、その時期期間限定でコミックスを公開している出版社もあったので、おすすめのサイトを紹介しました。

こちらは展示です。ニュースで頻繁に「コロナ」という言葉を聞くようになり、ウイルスや感染対策に関する資料を紹介した「感染症」の展示を行いました。ウイルスについて分かりやすく説明した資料や正しい知識と予防対策を身につける上で役立つ資料を選びました。4月に入ってからは、体や運動に関する資料も追加、テーマも「感染症」から「からだ、元気！」に変わったことで展示の雰囲気が一気に明るくなり、立ち止まる利用者が増えたように思います。小学生向けから幼児向けまで幅広い資料を紹介することができました。

「感染症」の展示は、保護者の方のほうが関心が高かったように思います。というのもこの時期ほかにも展示があったので、子供たちの興味はそちらにも向けられていました。その辺については、次の(2)のところでご紹介します。

こちらは、ツイッターを使って子供向けの本を紹介したものです。今年サービス制限中、図書館に入れない子供たちのために約7万冊ある児童書の中から図書館のぬいぐるみたちがおすすめの本を紹介しました。貸出しが事前予約だけになってから、本から離れてしまった子供たちが思わず借りたいとおうちの人をお願いしたくなるような、そんなテーマをつけて発信しました。

ここからは、(2)番、図書館の滞在時間を短縮できるように考えたイベントをご紹介します。スライドの7で「感染症」の展示と一緒に出していたと話したのがこちらです。セット本の展示です。作り方は簡単です。テーマごとに5冊資料を集め、それぞれ紙袋に入れます。手書きのテーマをつけたら完成です。イメージは、本の福袋なのですが、紙袋は再利用のものを使い、テーマは手書きなので、手作り感があり、ちょっとのぞいてみようかなと思わせる親しみやすい展示となりました。

児童担当だけでなく児童書好きのスタッフも喜んで協力してくれたので、本当に個性豊かなセットがたくさん並びました。児童コーナーを利用される方は貸出し可能な冊数目いっぱい借りていかれる方が多いので、その中での5冊というのはとても貴重です。こちらは中身が確認できるので、悩む手間を省きつつ、納得したものを借りることができます。いつもは選ばないような本が読めると大好評でした。

そして、こちらと同じ時期の展示です。シリーズ本を紹介しました。いつまで続くか分からないおうち時間に、じっくり読める長編シリーズに挑戦してもらおうと考えました。ただ、この展示は初めの巻が貸し出されてしまうと、もうそのシリーズは動かなくなるので、割と頻繁に入れ替えていました。途中からはピーターラビットやモンスターホテルなどどこから読んでもおもしろいシリーズ本を並べるようになりました。先に紹介したセット本と併せてとても利用の多い展示となりました。

そして、こちらは安全なおはなし会の様子です。厚生労働省の新しい生活様式の実践例や日本図書館協会のガイドラインに基づき、おはなし会を開催するにはと頭をひねった結果、室内でのおはなし会が難しいなら屋外でやればいけないと生まれたイベントです。写真だと見えづらいかもしれませんが、施設の入り口脇に読み聞かせブースを3か所設け、それぞれに話し手がスタンバイ、ご家族ごとに終わった次の家族、次の家族と入れ替わりながら読み聞かせをしました。事前申込み不要で、開催時間内であればいつでも参加できる10分程度の気軽なおはなし会です。読み聞かせブースは2メートル以上離し、ほかの参加者同士が接近しないようにしています。

受付では、ここ数日のところで熱が出るような風邪の症状はないですかとか、感染者が出た場合、保健所と関連機関と連絡先を共有していいですかなど感染拡大防止対策のため、体調確認や連絡先カードへの記入をしてもらいます。簡易マスクとアルコール消毒液も用意し、スタッフだけでなく参加者にもマスクの着用と手指消毒をお願いしました。マスクをお持ちでない方には手づくりの簡易マスクをお渡ししました。

おはなし会の会場が盛岡駅に近いので、目の前を新幹線やバスが通ると子供たちは大興奮です。読み聞かせの途中で席を立たれてしまい、しばし中断となったケースもありました。家族だけという安心できる環境で子供たちはいつもよりも伸び伸びと参加していたように感じます。「絵遊びしない?」とか、「こっちの本読んで」とか、プログラムどおりにいかないことが多く、スタッフの対応力を試されたようでした。外ということで、室内では起きないようなトラブルもありましたが、久しぶりのおはなし会に皆さんとても喜ばれていました。

こちら安全なおはなし会のご紹介です。岩手の民話をユーチューブで配信しています。どんな場所でもインターネットを通して気軽に見ることができます。2020年度新型コロナ感染拡大防止のため、ほとんど開催することができなかつたおはなし会に代わり、安心して安全におはなし会を楽しんでもらいたい。そう考えつくられたのが「いつでもどこでもおはなし会」です。第1回は「おにのてがた」、第2回は「お地蔵さまのおんがえし」、そして第3回は「天女の織物」です。お話の始まりと終わりには当館オリジナルキャラクターカップの「イワオくん」の挨拶を入れ、親しみやすい楽しい雰囲気になっています。

動画は、まず初めに台本づくりから取りかかります。民話集などの参考資料を読み、作成しています。長さは3分から5分程度で、小さい子でも分かりやすい内容です。台本ができたら、登場人物や背景セットもつくりまします。日常業務の合間に制作しているので、おはなしづくりから小物や背景制作、撮影、動画配信作業等で1か月半ほどかかります。

それでは、今から第1作目の「おにのてがた」を見ていただきますが、その前に突然ですが、ここで問題です。ジャジャン、「おにのてがた」はある名前前の起源となったお話です。その名前とは一体何でしょう。動画を見ながらぜひ考えてみてください。

こんにちは。僕、岩手県立図書館の「イワオ」です。さあ、これから岩手の昔話が始まるよ。

あれっ、何だか怖い叫び声が聞こえてきた。どうしたんだろう。

昔々、大昔、盛岡ではラセツという鬼が出て、田畑を荒らしたり、人をさらったり、悪いことばかりして村人を困らせていた。

「うおー」という恐ろしい鬼の叫び声が聞こえると、村人たちはみんな震え上がり、息を殺して隠れていたんだと。

「このままでは生きて心地もしねえ、畑仕事もできないんじゃない、干上がっちゃう。何とかできねえか」

困った村人たちは、三ツ石の神様に鬼退治をお願いすることにした。三ツ石神社の境内には大きな3つの岩があって、人々の信仰を集めていた。

この三ツ石様に願をかけて21日目、村人はみんなで境内に行ってみた。すると、何と鬼が大きな岩にぐるぐる巻きに縛られているではないか。

鬼は、三ツ石の神様に「神様、俺が悪かった。もう悪さはしねえ。助けてくれ」と泣きながら頼んだ。

すると、神様は、「これからは、決して村に現れるでないぞ」と約束させ、その印に三ツ石神社の大岩に「おにのてがた」を押させたと。

こうして神様に許された鬼は、どこへともなく逃げていき、二度と現れることはなかった。

村人たちは大喜びに喜んで、踊り回ったということだ。

そして、鬼が岩に手形を押したという話から、後にこのあたりを「岩手」と呼ぶようになったんだ。どんとはれ。

ああ、よかった。鬼はどこかへ行っちゃった。村の人たちうれしそうに踊っていたね。

では、次の昔話もお楽しみに。

動画を見る前に出した問題を覚えていますか。「おにのてがた」のお話は、ある名前の起源になっているという問題ですが、鬼が岩に手形を残しましたね。岩に手、岩手、はい、「岩手」の名前の起源でした。

第1弾の「おにのてがた」は、なれない作業にあわあわしながらも、何とかできたという感じでした。背景のサイズとカメラの画面が合わなかったり、人形を出し忘れたり、アクシデント続発です。その反省を踏まえ、精度を高めたはずの「お地藏さまのおんがえし」でも、やはり撮影中に思わぬ事態が。何しろ動画編集経験のないスタッフでつくっているの、人形を動かしている横で声を吹き込む、まさに一発撮りなんです。ついこだわってしまって、毎回撮影時間が3時間ぐらいになってしまいます。一番かわいそうなのは朗読係です。何度も何度も読まされ続け、申し訳ないなと思いつつ、懲りずに第4弾も制作中です。

(4) 番、ここからは密にならないイベントということで、昔話絵選挙をご紹介します。利用者がそれぞれ都合のいいタイミングでばらばらに参加するため、密になりにくく、安全に開催できるイベントです。実は先ほど紹介した「いつでもどこでもおはなし会」、第3回からは主人公を利用者の総選挙で選んでいます。きっかけは、アメリカの大統領選挙でした。子供たちにも投票を体験してもらいたいなと考えていて、そうだ、次の動画の主人公を決めてもらおうと始めました。今年は子供たちがたくさん来館する夏休みを狙ったのですが、残念ながら緊急事態宣言が出て、予定よりも早く終了となってしまいました。それでも短い滞在時間の中で参加できるちょっとしたイベントにたくさんの子供たちが票を入れてくれました。

動画配信だとどうしても参加者の反応を見ること

ができません。準備をする側としても、利用者がこれだけ期待してくれている、よし、頑張ろうというモチベーションアップにもなりました。

こちらにも密にならないイベントです。ふだんの本の展示に福笑いの要素を取り入れた「ふふふ どんなかお」です。お正月に開催しました。顔に関する資料を展示して、そこに挟めてある顔のパーツで福笑いをしてもらいます。福笑いに使う顔のパーツはランダムに挟まっています。そのパーツを使って児童コーナーに掲示されたのっぺらぼう状態の顔の台紙にぺたぺたと貼ってってもらいます。目ばかり当たる子や動物の鼻や口が当たる子なんかもいて、パーツが全部そろうことはまずありません。1つの顔を何人もの子供たちで完成させるので、滞在する人が減って、少し寂しい図書館でもほかのお友達の存在を感じることができます。

イベントは、とても気に入ってもらえたようで、中にはパーツだけなくなってしまった資料もあったほどです。保護者からも家でやったことがないので、体験できてよかったと話しかけられました。ちょっと複雑かなと心配していたので、本当にほっとしました。

ほかの本を選んだ後で、まだ1冊借りられるなら福笑いの本を借りよう最後の1冊に選ばれることも多く、手に取って「この本おもしろいじゃん」という新しい本との出会いにも一役買ってくれたようです。

この写真では分かりづらいかもしれませんが、壁がガラスになっているので、福笑いの台紙を表面にしておき、図書館の外から見た人にも何か楽しそうなことしていると思ってもらえるようになっています。

こちらは、今年の春に開催した「図書館陣取り合戦(春の陣)」です。私が常々思っていることがあるんですが、図書館に来た子供たちを見ていると来館して真っすぐ蔵書検索機に向かう子がすごく多くなってしまうんです。中にはずっと検索機に座り、請求票を出してスタッフに渡す、持ってきてもらうを繰り返して、一度も棚を見ないなんて子もいたりします。もったいないな、棚を見るのって楽しいのって思っていました。

そこで、子供たちが棚に行きたくくなるようなイベントとして考えたのが陣取りゲームを取り入れたこのイベントです。本の感想を所定の用紙に書き、イベント用の特大配架図にどんどん貼ってもらいます。ピンクチームが幼児と大人、黄色チームが小中学生です。自分のチームの色の用紙にタイトル、著者名、本の感想を書き、その感想を書いた用紙で配架図を埋めて児童コーナーの陣地を取り合います。貼り付ける場所が分からない子のために回収ボックスを置いたのですが、ほとんど使われることはありません。

でした。やっぱり子供たちは自分で貼りたくなるようで、本のある場所を探して配架図の場所と照らし合わせてと、行ったり来たりしている姿をよく見かけました。

2か月掲示し、その間であればいつでも参加することができます。ただ、開始当初は分かりづらかったようで、挑戦してくれるのは小学生がほとんど、全く勝負という感じがしませんでした。それでも初めの月、圧倒的有利と思われた小中学生の黄色チームが後半の月だけで見るとピンクチームに1票差まで追い詰められるなんてことが起こったりします。みんながやっているならやってみようかなとどんどん参加しやすくなっていくので、ふだんは遠慮しがちな子供たちでも参加することができます。特定の日にやるよというイベントにはない設置型のイベントのいいところだなと思います。それなので、特に新しいイベントのときは、なじむまで少し長めに期間を設定し、見守るのもいいように思いました。

こちらは、施設見学の受入れが難しい状況が続いていることから、代替コンテンツとして県内の学校を対象にできた「コンシェルジュ出前見学会」です。当館の案内人であるコンシェルジュが皆さんの学校にお邪魔して図書館の利用方法や書庫の秘密をご案内しています。詳しくは当館ホームページ学校・団体向けサービスを御覧ください。

新しいことを考えるというのは、しかも誰も経験したことがないこの状況で、とても不安なことだと思います。もし行き詰まったら、ぜひ周りのスタッフと楽しく、ここ重要です、楽しい企画は楽しく話しているときに思いつくことが多いので、楽しくお話をしてみてください。あんなに悩んでいたのがうそのようにぱっと問題が解決したり、アイデアが湧いてきた、ひらめいたなんてことがよくあります。スタッフ同士が気軽に話ができる、そんな環境を大切にするというのもすばらしいサービスや新しい企画が生まれる一つの要因ではないかと私は思っています。

私の周りにもやってみましょう、いいじゃないですかと前のめりに話を聞いてくれるスタッフがいてくれたので、思い切っているいろいろなことに挑戦することができました。

ソーシャルディスタンスが定着してきてはいますが、スタッフ同士の心の距離はぐっと近づけて、子供たちのいつでも安心して本と出会える、ここに来れば楽しい思いができる、そんな場所を力を合わせて守っていければと思います。

コロナ禍でもできること、コロナ禍だから始められること、これからも模索しながら、共にウィズコロナ時代を乗り切りましょう。

ありがとうございました。

■全体会（研究討議）

「これからの時代における児童サービス

～未来を担う子供たちの読書活動を支援するために～

【コーディネーター】

藤澤 陽子 氏（「語りの会 風楽堂」主宰）

【パネリスト】

舛屋 藍 氏（一関市立一関図書館 主任司書）

江刺 由紀子 氏（特定非営利活動法人おはなしころりん理事長）

沼宮内 望 氏（岩手県立図書館指定管理者 司書）



藤澤：こんにちは。全国公共図書館研究集会の全体会を開催いたします。全体会のテーマは、「これからの時代における児童サービス～未来を担う子供たちの読書活動を支援するために～」です。事例報告をしていただいた3人の皆様に、本日はパネリストとしておいでいただいております。

事例報告の内容も、地域密着型の児童サービスや学校連携であったり、読書でのまちづくりであったり、これも新しい視点ですばらしいなと思いました。また、現場での斬新なアイデアも、どこからアイデアが湧いてくるのかなと思ったんですけども、本当に三人三様のすばらしい内容だったと思います。それぞれ児童サービスや読書推進にかける思いがとても深い方々だと感じています。

まず初めに、それぞれの読書推進にかける思いがどこから始まったのか、読書にかける原点とか、そういったところをお話していただきたいなと思っています。子供時代の好きだった本やあと読書の

思い出などお話しいただきながら自己紹介をしていただけますか。

では、まず一関図書館の主任司書の舛屋藍さんからお願いいたします。

舛屋： こんにちは。一関市立一関図書館の主任司書の舛屋藍と申します。よろしくお願いたします。

子供時代好きだった本について、2冊挙げさせていただきます。1冊目は村山早紀さんの『やまもも娘、街へゆく』という本です。小学校5年生のときに読み、女の子がどうやって自立していけばいいかということが具体的に書かれていてとても元気づけられて、その後の進路選択にも影響したような本でした。

もう1冊は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』です。こちらは、小学校5年生のときに学習発表会で影絵劇を行いました。体育館を真っ暗にして、壁一面に銀河鉄道の世界が広がるという体験をして、

初めてみんな一緒に物語の世界に没入するという体験をさせてもらったということで、とても印象に残っています。

藤澤：すごいですね、壁一面に真っ暗にして。

舛屋：はい、もう忘れられない、みんなの思い出に残る学習発表会でした。

藤澤：なるほど。それは忘れられないですね。

舛屋：はい。

藤澤：そうすると、伺っていると「自立する」とか、「冒険をする」とか、そういった本が好きだったのかなという気がするのですが、

舛屋：そうですね、子供時代を支えてくれる、力になってくれる本にたくさん出会ってきたと感じています。それで、本が好きになって図書館に勤めるようになりました。

藤澤：なるほど。では、それが今出ているという感じですね。

舛屋：はい。

藤澤：素晴らしいですね。

舛屋：よろしくお願ひいたします。

藤澤：ありがとうございます。

では、特定非営利法人おはなしころりん代表の江刺由紀子さん、この中で私と同じぐらいの年代かなと思うのですが、江刺さんの子供時代はいかがだったのでしょうか。

江刺：私は、今は亡くなった母との思い出をちょっとさせていたただきたいと思います。同世代なら分かると思うのですが、私たちが子供の頃、同じく小学5年生のあたりというのは、土曜日は午前中しか授業がなく、午後は帰っておりました。私の母は、フルタイムで働いていたのですが、土曜日の午後、あるとき何を思ったのか分からないのですが、調整して早めに帰ってくるようになったんです。時間を決めて、母が私に読み聞かせとか、朗読をする時間を設定してくれました。

藤澤：それまでは、あまりそういう活動は。

江刺：ないです。

藤澤：なかったのですか。

江刺：私は本をそんなに読まなかったものだから、そういう私を見て、本の良さを伝えようとしたのではないかな。それをするには、まずは自分からという感じではなかったのでしょうかね。

家の日が当たる縁側で母が、小さい体の母が背中を丸めて一生懸命読んでいた横顔をよく覚えております。日差しが温かかったので、いま時分の季節じゃないかなと思っていたのですが、縁側で私は寝転がって母を見詰めていたのですが、内容はもう頭に入ってきてみません、いつも忙しい母が自分が感動しているこの本を子供に伝えたいという思いはひしひしと胸の奥に入っ

てきて、愛情は私のベースになるというか、忘れられない幸せな時間として根づいております。

本の楽しみもなんですけれども、本を通したそういう愛情のやり取りというところに私は非常に関心があるので、それで岩手の沿岸地域の大船渡でNPO活動を続けているという、そういう感じ

藤澤：なるほど。では、事例報告にあった「読書でつなぐ」、「読みつなぎ」というのも、本当に人と人とを読書の温かさとか、そういうのでつなぐたいという思いにあふれたものだったんですね。

江刺：はい、まさにそのとおりです。

藤澤：江刺さんの今の活動の原点が今のお話で見えた気がします。

江刺：ありがとうございます。

藤澤：ありがとうございます。

それでは、今度は岩手県立図書館の司書をなさっております沼宮内望さん、お願ひいたします。沼宮内さんは、聞くとところによると絵本の制作もしていたそうで、そのことも踏まえながらお話をいただけますか。

沼宮内：はい。岩手県立図書館指定管理者サービス1課児童サービス担当の沼宮内望と申します。よろしくお願ひいたします。

私が幼いときに一番好きだった絵本は、レイモンド・ブリッグズ作、角野栄子が訳した「くまさん」という絵本が一番思い出に残っています。この本は、小学校1年生のときに担任の先生がプレゼントしてくれた絵本でして、内容としては普通のおうちにシロクマが現れて……

藤澤：普通のおうちに。

沼宮内：はい。現れて、なのに大人たちの目にそのシロクマは見えないというストーリーなのですが、大人はそんなものはいるわけない、おうちの中にいるわけないと思って、近くにいるそのシロクマを見ようとしないうという物語で、私はこの本を読んだときに自分が大人になったときのことを想像して、もしかしたら自分もそうやって見えないと思ひ込むのではないかなという疑似体験をした絵本になります。

この本を読んで、私は大人の気持ちを体験してしまったと驚いたのですが、そして私がその中で何よりも気に入ったのが漫画のようなコマ割で全ページ書かれていて、その小さなコマ一つ一つにほかの本の1ページ分の絵本の絵が一本一本線が細かく、いろいろな色を使って書かれているというその書き方に感動しました。

藤澤：絵が好きだったんですね。

沼宮内：はい、そうなんです。そのままねして書くようになりまして、大学で絵本制作を専攻しまして、絵本を書いているうちに私が好きな絵本とい

うのは、ほかの人もおもしろいと思うのだろうかというのが気になるようになりまして、図書館に勤めるようになって、児童サービスに触れて読み聞かせをするようになりました。そうすると、実際に子供たちの反応を肌で感じるようになってどんどん児童サービスに夢中になっていきまして、今の活動に至るんですけれども。

藤澤：なるほど。もともと司書を目指していたわけではなくて、まず絵本にご興味があって、絵本制作をまずやってみて、さらにそれを深めたいというところから子供たちの読書活動に目が向いてきた、というところなんですね。

沼宮内：はい、そうなんです。

藤澤：なるほど。

沼宮内：読み聞かせをするようになりまして、このレイモンド・ブリッグズの「くまさん」がその読み聞かせであまり登場しないということに大変ショックを受けまして。

藤澤：どうしてもコマ割の絵本というのは遠目がきかないというところで、読み聞かせではちょっと避けられがちな本ですものね。

沼宮内：はい、そうなんです。私たちが届けなければ、子供たちの目に触れない本って図書館にもたくさん眠っていると思いますので、そういう本を展示、当館を通して私たちが紹介できたらなと思い、活動しております。

藤澤：なるほど、いいですね。読み聞かせのときに、「こういうおもしろい本があるよ」とブックトークみたいに紹介したり、いろいろまた本の世界が広がると思うので、ぜひぜひよろしく願います。

沼宮内：よろしく願います。

藤澤：ありがとうございます。

さて、今回は「新しい生活様式の中で」というテーマがあったのですが、コロナ禍で図書館の工夫事例としていろいろやっていただいております。斬新なアイデアで、おもしろいなと思ったのは県立図書館の「イワオくん」、あれ沼宮内さんがお作りになったんですって。

沼宮内：折り紙は私が作りまして、キャラクターは別な者が作りました。

藤澤：折り紙は、ずっと前からやっていらっやったんですか。

沼宮内：いいえ、今回が初めてで、動画を作るために。

藤澤：動画を作るために。

沼宮内：はい、始めました。

藤澤：キャラクターが作れるというのは、すごいですよね。

沼宮内：もともとやっていないから、自由に作れているのかもしれないです。

藤澤：またオリジナルキャラクターが紹介してくれるというところで、子供たちも身近に感じるお話になるのかなという気もしました。あれはどなたが作ろうと言ったのですか。

沼宮内：動画制作ですか。

藤澤：ええ。

沼宮内：絵本を届けたいという気持ちがあって、今何もできない状況下で、何ができるか。じゃ、動画で配信をしてみようというスタッフの話があり。

藤澤：みんなで。

沼宮内：ええ、やってみましょうということで。

藤澤：なかなかやってみたいなと思っても、機械のことを勉強したりとか、新しいことにトライするというのは大変なことだと思うんですけど、そのあたりはみんな「えっ」という人はいなかったんですか。

沼宮内：最初はそうだったんですけども、協力してくれる方が、スタッフがいたので、みんなで児童の枠を越えて、みんなで作りましたというので、動画ができあがりました。

藤澤：児童の枠を越えて。

沼宮内：はい。

藤澤：では、本当に児童担当だけじゃなくて、いろんな方が携わって動画制作を。

沼宮内：はい。

藤澤：なるほどね、すばらしいですね。鬼の手の話が一番最初の「岩手」の由来の話だったんですけど、最後のほうに「さんさ踊り」の由来のところもちらっと出てくるんですけど、本当にとっても分かりやすく、また絵だけじゃなくて、折り紙でやったところが立体感があって、すごくいいなと思いました。

また、「陣取り合戦」とか、「福笑い」とか、あれはなかなかない発想ですよ。

沼宮内：ありがとうございます。

藤澤：あれはどんな発想で出てきたものなんですか。

沼宮内：お客様と接する中にアイデアってたくさん隠されているとは思いますが、例えば陣取り合戦もそうなんですが、「夏休みになると読書感想文が書けない」ですとか、「自由研究でこんな本を使いたいから探してください」という声をよく耳にするんですが、そこで例えばそれを解決するために、例えば今年ですと読書感想文が書きやすくなるような書き出しシートを提供したりですとか、自由研究に役立つ本棚がもうあるので、そこに自分の好きなタイプ別に指し示した自由研究タイプ別診断の表を掲示したりして。

藤澤：タイプ別診断ですか。

沼宮内：ええ。イエス・ノーシートみたいなもの

を作りまして、虫が好きな人はこっちとか案内して、最後は分類番号の棚に案内するようなシートを今年の夏に。

藤澤：それをやっていると、自然にその棚の前に行ってしまうみたいな。

沼宮内：ええ、そうなんです。

藤澤：おもしろいですね。

沼宮内：そういう何か課題があったら解決して、お客様の声に耳を傾けるうちに自然とこんなイベントがあったらいいなというふうに思いついて、考えております。

藤澤：なるほど。最初に司書になられたのも子供たちがどんな反応をするかというところだったんですけど、お客様の反応を見ながら、アンテナを張りながらという、その双方向の思いでそういったいろんなものができている感じなんですね。

沼宮内：はい。

藤澤：おもしろいです。確か岩手県立図書館は、平民宰相として有名な原敬が提唱して大正11年に開館したので、実は来年で100歳を迎えるそうですね。建物は途中で2回ぐらい建て直しているので、すごく近代的な新しい建物ではあるんですけど。また全国的にも珍しい指定管理と県職員と両方いるという図書館で、その形は岩手県立図書館が先駆けだったんですけど、現在は全国で県立7館が指定管理を導入していると聞いていました。これも役割分担がうまくいっている例なのかなと、コミュニケーションがしっかりとれているのかなと思っていました。すごいですね。

沼宮内：ありがとうございます。

藤澤：何かもう一つPRしたかったことがあるんですけど。

沼宮内：はい。県立図書館では、フリーペーパーを毎月発行してまして、「ぺっこ」というんですけども、ここに最新のイベントの情報や、あとは郷土資料の紹介なんかもこちらでしております。イベントの丸秘秘話ですとか、スタッフしか知らないような図書館の裏話、裏情報とかも紹介しているので、もしよかったら見てみてください。

先ほどオリジナルキャラクターの話が出たんですけども、そのキャラクターたちが個性豊かに紹介しているので、大人から子供まで楽しんで読むことができます。ホームページにバックナンバーもあるので、もし、もらい逃した、見逃したという方がいたら、そちらからも御覧になってください。

藤澤：なるほど。図書館に来てそれを頂いてもいいですし、遠方の方でしたらホームページで御覧になることもできるということですね。

沼宮内：はい。

藤澤：ちょっとおもしろそうですね、秘話とか、

何か心惹かれるものがあります。ありがとうございます。

さて、同じ図書館の児童サービスといっても、また岩手県とは立場が違って、市町村立となると学校も市町村立の学校が大体公立学校って多いので、すごく学校と連携しやすいという違いが出てまいります。これまで強化してきた学校連携がコロナ禍でも揺るがない児童サービスになったというのが一関図書館さんだったなと思っています。

一関図書館さんは、近代国語辞書をつくった方が一関のご出身でしたか。

舛屋：ゆかりの方です。

藤澤：一関図書館の基本理念というのもすばらしいですね。

舛屋：ありがとうございます。一関ゆかりの国文学者の大槻文彦という方がいまして、その方にちなんで一関図書館の基本理念として「でかけようことばの海へ知の森へ」という理念を掲げています。

藤澤：格好いいですね。

舛屋：ありがとうございます。図書館に来ることでたくさんの本に出会う、そこから選ぶ楽しみというのを大事にしています。このコロナ禍でも、もちろんオンラインのサービスや電子図書館のサービスも大事ではあったのですが、やはり何とか感染対策をした上で、たくさんの本と出会う機会を設けたいということで、令和2年度はサービスを行ってきました。

藤澤：確か国語辞典ね、「言海」という言葉の海と書く国語辞典なんですよのね。

舛屋：はい。

藤澤：そこから「ことばの海へ」というスローガンをお取りになった感じなんでしょうか。

舛屋：はい、そうですね。

藤澤：そして、その本の海の中に来るような、そんなイメージでたくさん本があるというところですね。

舛屋：はい。

藤澤：一関市さんは本当に図書館に力を入れているなと思っています。県立図書館も大きくて立派なんですけど、一関市さんも宮城県と岩手県の県境のあたりに立地していらっちゃって、宮城県からも利用者が多いと伺っておりますし、またその貸出し冊数に制限がないそうですね。

舛屋：そうですね。貸出期間は3週間で、何冊でも借りることができます。一関市は8つの市町村が合併してできた市で、それぞれに旧図書館があったので、今は市内に8つの図書館があります。それぞれの図書館で特色のある収集を心がけているので、お客様からは「図書館を巡る楽しみ、本と出会う楽しみがある図書館」という言葉をいた

だいたりします。

藤澤：そうですよね。市民ではなくても借りられるのですものね。

舛屋：はい、そうです。

藤澤：同じ一関市の川崎図書館さんに行ったときに、たしか本だけじゃなくて、おもちゃの貸出しもしていて、それもおもしろいなと思いました。子供が乗っかって、バンバンとパウンドできるようなおもちゃとか、いろいろなものを貸出ししていたので、それはすごくいい取り組みだと思いました。

また、読書普及員さんも毎週旧市町村ごとにある地域館に集まっているんですよ。

舛屋：はい、令和2年度は毎週1回という形で図書館へ勤務いただきました。旧市町村ごとに地域の小中学校の読書普及員さんに地域の図書館に勤務いただき、図書館から学校図書館を支援するという形で連携しています。

藤澤：読書普及員さんは、図書館で雇用しているのですか、それとも学校教育課さんのほうで雇用しているのですか。

舛屋：学校教育課で雇用し、各小中学校に配属になっている形です。そのうちの毎週1回、午前中だけ、図書館に勤務していただいて、そこで読書普及員さん同士が情報交換をしたり、公共図書館の資料、コミックスとDVDを除いた全ての資料小中学校に貸出しができるということで、市内の8つの図書館の資料を小中学校の皆さんが活用できるという体制を整えています。

藤澤：じゃ、授業で使いたいとか、何かのときには毎週行ったときに本館や分館から借りて、整えて、みたいなの。

舛屋：はい、そうですね。

藤澤：本当に図書館と学校の連携が密にうまくいっている例ですね。

舛屋：はい。小中学校に関してはもともとつながりを持たせていただいていたので、このコロナ禍でもそのつながりを続けることができたのですが、ただし保育園、幼稚園ですとか、網羅してつながりを持っていなかったところには、コロナ禍で新たにサービスを行うことがなかなか難しかったんですね。今後はそれぞれの機関とも日頃からどんどん連携をとっていかなければいけないというのが反省点であり、令和2年度特に感じたところでした。

藤澤：たしか一関市さんは冊数制限がなかったり、学校としっかり連携していることから来館者数は減っても貸出し冊数が落ちなかったんですよ。

舛屋：そうですね。

藤澤：すばらしいですよ。

舛屋：落ちなかった、回復してきたという形なん

ですが。

藤澤：大きくはね。

舛屋：はい。皆さん図書館に来る頻度を落として、その代わり一度に借りる冊数を増やす傾向がありました。紙の需要と申しますか、本を読みたいという機運はコロナ禍でもずっとあったということを感じていました。

藤澤：なるほど。そういえば、紙の本の話が出たんですけれども、電子図書館も導入しているんですよ。

舛屋：はい。令和2年12月1日から「いちのせき電子図書館」を導入しました。まだまだ冊数は少ないんですけれども、図書館に来られない方、そしてコロナ禍で来るのが心配という方に向けて、子供の本やいろんなジャンルの本、音声読み上げができる資料、それから特色あるものとしては「一関のことを知ることができる本」などもあり、ようやく整備が始まったところでした。

藤澤：やっぱり、紙の本を借りる層と、電子図書を借りる層は違いますか。

舛屋：違うかなと想定して始めたのですが、今のところ同じ層、もともと本をたくさん読む方で、電子図書館も使ってさらに読んでみようという方が多いようです。そのため、想定よりも高齢の方の利用が多く、60代、70代、80代の方のお申込みも予想以上にありました。なので、私達も利用状況を見て、新たにこういう本を買わなければいけないなということで、利用者に合わせて充実を図っているところです。

藤澤：おもしろいことですね、データとしてはね。

舛屋：はい。

藤澤：一関図書館の取り組みについて、ご質問を2ついただいているんですけれども、一関図書館の取り組みの中で、学校図書館に団体貸出ししているということだったんですけれども、その中で児童生徒からのリクエストがありますが、アンケート調査のようなものを行っているのでしょうか、それとも読書普及員の方が子供たちの声を直接集めているのでしょうか、それを移動図書館みたいな形でお届けしているのでしょうかという質問なのですが。

舛屋：児童生徒からのリクエストの受け方につきましては、読書普及員さんがメインになって常日頃から受けていただくような形になっています。リクエスト図書の学校へのお届け方法については2つありまして、一つは読書普及員さんを経由して本を学校に届けてもらう方法。一関図書館のウェブOPACから随時予約申込みができるようになっていまして、子供たちからリクエストがあったらすぐ予約できます。その本を読書普及員さんが週1回、公共図書館にいらしたときに持って帰

ってもらおうという形が一つ。

もう一つは、移動図書館で届けるという方法もとっています。

藤澤：なるほど、両方の方法があるんですね。

舛屋：はい。

藤澤：もう一つの質問なんですけれども、読書普及員の授業支援で、今はどんなことをしていますかという質問をいただきました。

舛屋：1つは、一関市立図書館全体の蔵書から、授業の単元に合わせた本を図書館側で選書して、例えばこのテーマで50冊、大豆をテーマに50冊と。

藤澤：大豆の本50冊。

舛屋：毎年あるんです。授業の単元のテーマなどでリクエストいただいて、それを図書館側で用意しまして、貸出しして読書普及員さんに学校に持って帰っていただいています。あとは、公共図書館の司書が学校へお邪魔して、ブックトークや読み聞かせも行っていきます。

特色のある取り組みとしまして、『絵本給食』へも協力を行っています。学校教育課、給食センターが主催で実施しているのですが、絵本の中に出てくる食材や料理が、給食の献立になって出てくるという……

藤澤：おもしろい。

舛屋：食育と読書推進を同時に行おうという取り組みです。例えば安房直子さんの『雪窓』という絵本にはおでんがでてくるのですが、この絵本を読み聞かせしたり、関連する食べ物の企画展示を学校で行っていただいて、同時に給食でもそれが出てきて、どちらについても興味を持って理解を深めてもらうという取り組みです。この『絵本給食』への支援もここ数年行っているところでした。

藤澤：その絵本給食の読み聞かせはどなたがどのタイミングでするんですか。

舛屋：例えば読書普及員さんに、給食の時間に放送で読み上げていただいたりとか。

藤澤：放送で。

舛屋：はい。あとはおはなし会で、絵本を見せてこういう食材が出てくるんだよと伝えていただいたりしていました。

藤澤：子供たちの反応はどうですか。ワカメとか、食材をいろいろ絵本で見たりすると盛り上がりませんか。

舛屋：絵本は子供達に借りられているようです。絵本と食材をうまく結びつけるのがなかなか難しかったりするので、毎年本を替えて試行錯誤しているところなんですけれども、おでんとか、サンドウィッチとか、いずれは岩手の地元の食材とかも入れられたらいいなど。子供たちは給食を食べながら、楽しく聞いてもらえているようです。

藤澤：同じ地域に根差した活動ということで、今

一関図書館からも教えていただいたんですけども、NPOとして読書をまちづくりに広げようというのが大船渡市のおはなしころりさんですね。

江刺：はい。

藤澤：いろんなNPOが、まちづくりをなさっていると思うのですが、読書を軸にまちづくりというところはそう多くないというか、素晴らしい活動をなさっていると思っています。事例報告の中で、たしか「国際協力」というのがあったのですが、読書で「国際協力」とは何かなと思いました。そのあたりのことを具体的にお話ししていただけますか。

江刺：きっかけは2011年の東日本大震災なんですけれども、その後は地元の人間たちだけの足で立ち上がるというか、立ち直ることは到底難しく、日本中、また世界中の人たちから助けられました。そのおかげで何とかここまでたどり着くことができたということで、非常に感謝しております。

たくさん支援をいただくところの裏側にはちょっと難しい面もあって、被災地の人たちは助けってもらうことに慣れ過ぎるところが危ないなというふうに思っていました。依存し過ぎては、その後私たちが自立していけないなと思ったところなんです。特に子供たちが支援もらいっ放しで当たり前っていうふうになっていくと、これはどういう子供に育っていくのだろうと思うとちょっと不安があったものですから、恩返しというような言い方にして、被災地の子供たち自身も何かアクションを起こす、助けをいただいて、非常にうれしかったその気持ちを今大変な人たちに送り届けるっていうことをすることで、今の子供たちが成長する中で、地域のため、日本のため、社会のためにどんどんアクションを起こしていけるような、そういうふうになっていけたらなというふうに思いました。

何ができるかと思って、私たちは震災後に立ち上げた団体ではなくて、もうその前から読書に携わっていたものですから、読書という強み、読書関係、読書推進活動に、それに震災復興を絡めることが、私たちができることであるし、そこがうちの強みだなと思いました。何をするのか、世界中のいろんな国の自然災害で苦しんでいる子供たちと大船渡の子供たちを本でつないで交流できないかというふうに考えました。

でも、最終的にたどり着いたところは、いろんな人たちと話をさせていただいたんですけども、国際NGOのシャンティ国際ボランティア会、この方々がアジアを中心に本を通じた社会教育の活動をしていたので、その方々と連携し、また伊藤忠記念財団、文庫活動などをずっとしているとこ

ろであります日本中の人たちが知っているところなんですけど、そのシャンティ国際ボランティア会と、あと伊藤忠記念財団、あと現地での活動部隊としておはなしころりん、この3組織が組んで事業を立ち上げたのが9年前です。コロナ禍にあっても、これは問題なしということで。

藤澤：9年前というと、10年前が東日本大震災ですから、それこそまだまだ瓦礫もあって、復興の「ふ」が見えるか見えないかぐらいですよ。

江刺：そうです、はい。

藤澤：そのときに、もうそんなことを考えていたんですか。

江刺：例えば被災地の人間は、自分のところではテレビを支援してもらった。でも、隣の家では支援で大きなカラーテレビを支援してもらった。うちのほうが小さいとか、去年は無料で頂けたものが今年はお金がかかるそうだとか、そういうのは支援する側にとっても、私たちの自立を促すために工夫していらっしゃるんですけども、こちらの人間としては、うれしいという幸せの尺度を相手に投げているというか、相手の支援があって幸せでないと不幸せって思うのは、これはちょっと危険だと思ったんですよ。それは自分が行動を起こしていないからだと思って、自分が何か尽くして駄目だったら溜飲が下がるんですけども、何もしていないのに便利でなくなると不平不満が出てくるということも見ているものですから、被災地としてアクションを起こすことは必要だと最初から思っていました、直後ぐらいから。

コロナ禍にあって、この活動は9年間、小学校、中学校、高校で行っているんですけども、毎年200人から240人の子供たちに参加してもらって、絵本をつくって、その絵本を届けるという活動なんですけどね、学校それぞれコロナ禍にあっても、これはぜひ進めていただきたいということで、毎年申込みが殺到しております。日本の絵本に現地の言葉の訳したシールがあるので、それを切って貼る、全ページ貼る、そして最後に自分の名前を現地の言語で書いて、これを自分がつくったんだと。

藤澤：現地の言語で書くんですか。

江刺：はい。

藤澤：では、見たことも書いたこともないような文字のときもあると思うんですけども、その文字で子供たちが名前を。

江刺：はい、シャンティさんのほうで全部あいうえお順に言葉を並べてくださっているの、それを見ながら名前を書くことができます。こういうことを積み重ねていっているんですけども、小学校も中学校も高校も皆さん大変喜んでいただいて、感想などをよく寄せてくださるんですけど

も、自分は学校のため、地域のために何かしようと協力はするんですけども、遠い、会ったこともない人にも読書の喜びを届けることができたということで、子供たち自身の中でも充実したものがあがるようです。皆さんのご協力のおかげなんです。ただ、送りっ放しだとどうなっているのかわからないので、私自身が現地に2回ほど飛んでおります。

藤澤：すごいですね。

江刺：はい。1つはカンボジアのスラムで、もう一つはミャンマーの子供たちに届けるためにタイの山間部、国境にある難民キャンプ、そこの子供たちのところに行って、どんなに本が子供たちの心の支えになっているのか、喜んでいいのかというところを見てきて、写真に撮って、動画に撮って、大船渡に戻ってきて、大船渡の子供たちにお見せしています。そうすると、確かに役立ったという実感、このフィードバックが子供たちの次の行いにつなげるんじゃないのかなと思って、これは続けているところでもあります。

藤澤：大事ですよ。子供たちも自分たちと全然違う地域とか、文化とか、暮らしがあるって、その中で同じように本が大好きという子供たちがいるって、それを見るというのもすごく勉強になる気がしますね、広がるような気がしますね。

江刺：はい。本の楽しみというのは、どの子供たちも知っているんですけども、どこに生まれるかは自分たちでは選べないので、会ったことがなくても、今この地球上に生きている子供たちというのは友達だし、仲間だからという気持ちで手を差し伸べるというふうな、今大船渡の子供たちはそんなふうにして活動に参加してもらっています。

藤澤：そうですね、会ったことがないけども、仲間だからと、すごくすてきな言葉だと思います。いいですね。

江刺：ありがとうございます。

藤澤：ありがとうございます。そこが活動の二本柱の「本を窓に世界を知る」ですもんね。

江刺：はい。

藤澤：「地域を知る」とか、「地域をつくる」とかではなくて、「世界を知る」という柱ってすごいなと思いますし、もう一つの柱「本の力で心をつなぐ」。まさに今教えていただいた活動がそのまま生きているのかなという気がします。

その「読みつなぎ」という言葉も江刺さんの造語ですか。聞いたことないです。これもすごくすてきな言葉だなと思っていました。

江刺：本を読むことで人の気持ちがつながっていくということなんです。短い言葉で、小学生にも分かるような言葉で読み聞かせというよりも「読み

つなぎ」ということで、うちは活動に使っております。

藤澤：いいですね。読書というと、自由読書といってね、その人の好きな本を、ということが挙げられるんですけど、そこを一步進んで、好きな本とか感動をお互いに広げていく、共感していこうというところまで視点が広がっていくところがすごく素晴らしいなと思っています。

江刺：ありがとうございます

藤澤：ありがとうございます。いろいろ事例報告についても3人の方からさらに深めてお話をさせていただいたんですけども、今日の全体会のメインテーマが「これからの時代における児童サービス～未来を担う子供たちの読書活動を支援するために～」ということになっているので、まず児童サービスの重要性というか、皆さんがどんな思いで児童サービスをなさっているのかについても教えていただきたいと思っています。

最初の自己紹介のときに自分と読書の原点についてお話をさせていただいたので、そこから広がっていくものかなという気はするんですけども、何で読書が大切かというところを考えていきたいと思っています。

では、初めに舛屋さんからお願いします。

舛屋：児童サービスの重要性ということで、これはコロナに関係なく、これからも変わらないものだと思います。乳幼児期から、幼児期、小学校、中学校、高校とずっとそれぞれ読書活動というのは重要で、読書をすることで心が広がりますし、私の個人的な体験ですが、進路を選択するのに助けてもらったり、本当に成長を支えてもらったという実感があります。そういう本との出会いを継続してつくり続けていくというのは、公共図書館として本当に変わらず、ずっと大事なことだと考えています。

本を読むことで、先ほど江刺さんもおっしゃっていたような、地域の格差とか、環境の格差、それからコロナ禍の状況がどういうふう違うかということもたくさん本があることで、その格差を埋めることができると思っています。格差を埋めることもできるし地域の良さを知って、そこを伸ばしていくことも子供たちが自分でできるんですね。なので、読書推進をそれぞれの年代に向けて変わらずに継続していくということは、本当にこれからもずっと大事なんだなということを、令和2年度、3年度にかけて強く感じているところです。

藤澤：確かにコロナがずっと続くものではないかもしれないんですけども、こういったことになって、そういった格差であるとかというようなことももう一回見詰め直すきっかけになったという感じがしますね。

江刺さんはいかがですか。

江刺：子供の成長のことを考えると、経験の積み重ねって大事な後押しだなと思っているんです。経験を通してたくさんのことを学んでいくと思っています。ただ、人には、特に子供時代というのはもう限りが時間的にありますから、実体験も限りがあるということだと思います。

先ほど一番最初のお話で疑似体験のお話をしましたけれども、その点、本というのは本の中で幾つもの疑似体験ができるんですね。大人以上に子供というのは全くその主人公になって、同じわくわく、どきどき、スリルを味わって、その追体験によって達成感であったり、何かいろんなものを学べる。そういうところを考えると、本というのは大きな魅力だなと思っています、たくさん追体験ができるということ。そういうふうになると、児童サービスとしては子供たちに普段の信頼関係をベースにしながら、たくさん本を子供に手渡したいですし、子供にたくさん本を知ってほしいですし、その中から自分の忘れられない何冊か、1冊でもいいです、得ることができるかもしれないと思うと、私たちは読書によって子供が成長するための下支えというか、主体は子供であるべきだと思うんです。児童サービスをしてあげるとかではなくて、子供たちが子供たち自身で主体的に本を選んでどんどん本の中に入っていくような見えない縁の下の力持ちが児童サービスではないかと思っています。その児童サービスのする人の考えや行いによって、その表れ方って随分差があるのかもしれないというふうに思います。一言掛け声から、ちょっとしたポスターからっていうところを思うと、多くの人ができる児童サービスですけど、突き詰めていくと児童サービスというのはどこまでも精度を上げていくことができる難しい分野だと思いますし、重要な仕事だと私は思っています。

藤澤：そうですね、私もこの春から保育所長をさせてもらっているんですけども、やっぱり子供たちというのは真っ白なキャンバスとよく言われたりするんですけども、周りの大人のまねをしながら、社会とか世間というものを覚えていくところがあるので、ましてや読書が世界に広がるものであれば、その声かけとかそれをつないでいく人たちの振る舞いというものも、やっぱり子供たちにとって魅力があるものであれば、読書も魅力的に映るのかなって、そういうところも感じるところがあります。すごく周りの大人の責任というか、立ち居振る舞いも重要なところですよ。

江刺：はい。

藤澤：ありがとうございます。

沼宮内さんはどうですか。

沼宮内：私も今図書館に来ている子供たちのこの時期というのはすごく貴重な、何でも知識を吸収して、そういうところに私たちがその時期関わるといのはすごく貴重なことだと思うんです。なので、児童サービスは基本のところだとは思いますが、子供たちは絵本大好きなので、その本を欲しがっている子供たちに本を手渡す。先ほど一番最初に私が言ったんですけど、本を紹介する人がいなければ届かない本もあるということで、例えば課題を解決しに図書館に来ている子がこの本を欲しいって思ったときに、私たちのような児童サービスに携わる人間が適した本をその子に届けるという、その子は課題解決に効率的に情報を収集できる。そうすると、子供たちは情報の収集の方法をそこで学ぶことができます。そうすると、子供たちは自分なりに課題を解決して、発見したその過程に喜びを持つことができると思うんです。その喜びを持つことができれば、その後の学習の発展につながっていく、どんどんサービスというのはつながっていくと思うんです。なので、今回の自宅学習が続いたこの一人で勉強する子供たちが増えた期間とかというのは、私たちのサービスはとても重要になってきているのではないのかなというふうに感じました。

藤澤：そうですね、やっぱり人から教えられるというのもあると思うのですが、そうではなくて自分が読んで、能動的に動いて、それで自分の頭の中で、これとこれはこうだと発見することは、やっぱり子供たちにとってはわくわくするような体験だと思うのですよね。そういったわくわくを子供たちにたくさん手渡していけるというのも図書館の醍醐味かなと思います。

またもう一点、絵本をつくるときに、子供たちにとっては自分の作品はどうなのかと思い、このお仕事に就いたとこのことでしたが、そのあたりはどうですか、仕事をしてみて、子供たちの見方や感性など自分が感じる場所が変わったところというのはありますか。

沼宮内：私がつくっていたときは、子供はこういうものだという形に自分だけの中でとられ過ぎていて、子供も三者三様といますか、好きなものがそれぞれあって、それを追求するも一人ずつが虫博士とか、電車博士みたいな、そういう子供たちがいるので、その中で私がつくっていた今までの作品、ちょっとおこがましかったかなと。

藤澤：実際に生の子供たちを前にして、すごく自分の中でも子供の枠組みの枠が取れたというか、広がっていったというのを今お話を聞いていて感じました。

先ほど舂屋さんから、コロナも一通過点だという話があったんですけど、これからの児童サ

ービスについて考えていきたいと思います。

コロナがあったことで、GIGAスクール化やIT化も進み、いろんな図書館さんで電子図書館を入れたり、また図書館を訪問できなかったことで、著作権法も改正されて、図書館サービスにも新しい変化が起きようとしています。恐らくこれはコロナが収まっても、今できたサービスはそのまま続くという気がしています。コロナはあくまでも時代の一つの変化なので、これからはいろんな新しい生活様式、別な生活様式というのはできてくる可能性もあると思うんですけれども、その中で、未来を担う子供たちの読書を推進していくために、これからの児童サービスを考える上で大事なことはなにか、それにかかる思いとか、個人のお考えで構いませんので、それぞれお聞かせいただければと思います。

では、舂屋さんからお願いしてもいいですか。

舂屋：おっしゃっていただいたように、おそらくこれからはいろいろな困難は出てきますし、児童サービスの在り方方法としてもいろいろな方法が出てくると思います。それはずっと模索し続けなければいけない。そして、公共図書館としては情報収集して、方法を検討して、実施していくということをやっと繰り返していくしかないと感じます。でも、いつも念頭に置きたいのは、子供たちがどんなに本を楽しんでいるかということです。

私は移動図書館車に5年ぐらい関わっていたのですが、小学校に行き「移動図書館車が来たよ、どうぞ」と言うと、みんなダッシュで来て、ワッと借りて行って、もうすごい勢いでカードを出して、これ借りたい、あれ借りたいと。感想もすぐ言ってくれたりして、どんどんいろんな本を借りてくれる。子供たちが心から本を求めているんだということを実感しました。

それから、保育園におはなし会に行ったときに忘れられないのが、黙って表情も変えずに聞いてくれた子が何週間かたって、またおはなし会に行ったら、「あの本のこと夢に見たんだよ」と言ってくれて。おはなし会が終わったあとに、読んでもらった絵本を借りて帰りたくて泣いちゃった子もいました。新しい本に出会う喜びというものを、図書館サービスを行う中で子供たちの様子から実感してきました。それから個人的には、進路選択や自立を本に支えてもらってきたので、同じように本に支えられる子もいるんじゃないかと思っています。そういう、本との出会いをずっとつくり続けなければいけないということも公共図書館の使命、児童サービスの使命だと感じています。基本的な児童サービスは何のために必要なのかということをやっと考えながら新しいサービスにも対応していきたいなと思います。

藤澤：舛屋さんの表情を見ていて、子供たちが喜んだときのお話の仕方が、すごく喜ばれていて、私たちにとっても子供たちが本に出会ってよかったというときの笑顔ってエネルギー源になりますよね。

舛屋：もう本当に忘れられないです。

藤澤：そうですね。

江刺さんはいかがですか。

江刺：今聞いていて、まさにそのとおりでと思います。社会はどんどん変わって行って、思いもつかないような災いとか、今後も重ねていろいろ来るのかもしれませんが、時代を越えて。でも、そういうときの励みになるのは子供たちの笑顔だったり、キラキラした目だったり、また職場の仲間や活動の仲間の励ましとか頑張りだったり、そういうところを支えにしながら、これからも目的は変えずに方法を変えるところにそのまま私も思っているんですけども、たゆまなく、途切れることなく活動を続けていくっていうところが大事なんだと思います。

でも、同じことが日本中、世界中で通用するかといったらそうじゃありませんので、その土地の特色であったり、関わる人の強みであったり、そういうところでもってそれぞれがその場に、生活する子供たちに適した活動を立ち上げていくのがいいのだと思っております。といっても、急に新しいアイデアというのは難しいものですから、そういうときに横の連携が非常に役立って、例えばこっちの友達になっている図書館ではこういうふうなアイデアやっているらしい、片やこっちのNPOではこんなことをやっているらしい、ではうちの地域に適したのは、これとこれにうちのオリジナルを混ぜるっていうふうにすると全くどこにもない新しい事業が立ち上がるっていうところなんですよね。そういうときに、やっぱり横の連携とか、多くの人たちで手をつなぎ合って、支え合っているということは非常に有効だと思っています。今お話聞いてそのままなんですけれども、思ったところをお話しました。

藤澤：ありがとうございます。

沼宮内さんはいかがですか。

沼宮内：私は、先ほどもお話ししたんですけども、今児童コーナーに来ている子供たちのこの時期は何でも情報をキャッチして、自分でも知りたい、知りたい、何で、何でっていう、そういう時期だと、どんどん吸い込む時期だと思っています。

その時期に感動する本と出会ったり、達成する喜びをそこで経験してもらえれば、その子のそれが成長していく上での基盤になると思います。なので、私もそういう時期だからこそ、図書館で教養を深めて感動する本と出会えるような、そんな場所を守ってつくっていきたいなと思っています。藤澤：ありがとうございます。

IT化が進んで、今回いろんなウェブの読み聞かせだったり、電子図書館だったり、さまざま普及したとは思いますが、この前こんな話を聞きました。生の読み聞かせとウェブの読み聞かせの違いです。ウェブで画面上で見た絵では、本当に小さいお子さんだとその名前を覚えることが出来なかった。生の読み聞かせでお話をしたときには覚えられた、そういう違いが実際にあるというのを伺いました。

最初に江刺さんもお母さんの本の内容ではなくて、温かいぬくもりがあったのがすごく今の原点になっているというお話もありましたし、国際協力についてもただ現地の映像を向こうから送れば安く済んだかもしれないけど、わざわざ江刺さんが現地に実際に行って、本当に生の声を集めて届けて子供たちに見せたことで、また子供たちがさらに深めていくというか、そういったこともあると思いました。舛屋さんが、さっきの移動図書館車でワーツと来たのがすごく自分のエネルギーになったとか、沼宮内さんも現場でいろんな人たちの観察をしながら、では何が今必要かというのを考えていろんなアイデアが浮かんできたというのがあったように、本当に幾らITが進んだとしても、やっぱり本を手渡す生の大人、生の人間の、生の熱い心があってこそ、相手に響いていくと私は思っています。

確かにコロナは想像がつかないような大変なことだったんですけども、何があるか分からないのが人生なので、これからも別なまたいろんなことがおきて、悩むときもあるかもしれないけれど、やらないよりはやったほうがいいし、チャレンジをしながら、そして生身でお互いにつながっていきながら、温かい気持ちで、子供たちに本を手渡していけたらいいなと思っています。本当に今日は3人の方、すばらしいお話をありがとうございました。

沼宮内：ありがとうございます。

江刺：ありがとうございました。

舛屋：ありがとうございました。

令和3年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）実行委員会

No.	区 分	所属・職	氏 名
1	委員長	岩手県立図書館 館長	藤 岡 宏 章
2	副委員長	盛岡市立図書館 館長	馬 場 雄 一
3	委員	二戸市立図書館 館長	畑 本 啓 子
4		盛岡市都南図書館 館長	猿 川 由 子
5		盛岡市立渋民図書館 館長	櫻 庭 直 樹
6		(株)TRC 副総括	似 内 千鶴子
7		(株)TRC 副総括	安 保 和 徳
8	事務局員	岩手県立図書館 副館長	後 藤 啓 之
9		岩手県立図書館 主任主査	佐 藤 奈津子
10		岩手県立図書館 主任	澤 口 恵 美
11		岩手県立図書館 主任	鈴 木 幸 絵
12		岩手県立図書館 主任	佐 藤 友 也
13		岩手県立図書館 主事	千 田 修 平
14		岩手県立図書館 主事	木 村 玲
15		岩手県立図書館 会計年度任用職員	菅 原 英 子

令和3年度

全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)及び

北日本図書館連盟研究協議会 報告書

発行年月日 令和4年1月27日

発行所 岩手県立図書館